

記憶を紡ぐ

第一章

記憶は綿花のようである。硬い殻がはじけた時出現する綿花は、ふわりとした、てんでばらばらの方向を向いた無数の繊維の塊である。その塊から繊維を選び出し、紡ぐことで、一本の糸が生まれる。糸になった記憶は容易に切れることはない。多くの糸は織られ、やがて白い布になる。この記憶の布には、必ず人々の「愛した」と「恐れた」ものが織り込まれている。

序章 「いっぱいの水」

被爆体験記「いっぱいの水」

一九八五年（昭和六〇年）、被爆四〇周年を迎えるにあたって、愛知県原水爆被災者の会（愛友会）婦人部の女性たちが、これまであまり語られることがなかった会員の女性たちの被爆体験を集めた冊子『原爆、忘れまじ』を発行した。「いっぱいの水」はその第一集に掲載された長崎の被爆者、池田（旧姓）縫子の手記である。

縫子は「よかです」とぶっきらぼうに答えた。

嬉しそうに頷く班長の後ろには、華奢なMさんが大柄の班長の体に寄り添うように身を隠して、縫子の様子をうかがっている。

「ほんなこつ悪かね。Mちゃん丈夫やなかけん無理させられん」

「一九四五年八月九日朝、夏の青空はあくまでも高く澄み渡り、太陽はまた、今日の暑さを思わせるほどギラギラと照りだし、裏山の蟬の騒々しい鳴き声、三週間の深夜勤務を終え、私は同僚のMさんに仕事の申し送りをしました。彼女は実は深夜勤務のはずでしたが、昼勤の私に班長を通じて交代を依頼したのです。私はこれを気持ちよく引き受けました」

縫子は三〇分ほど歩いて自宅に帰り、すぐ仮眠をとることにした。三週間ぶつ続けの夜勤でくたくたに疲れていたのに、Mさんを鼻肩している班長のせいで今日も夜勤になってしまった。暑苦しい上着とモンペを脱いで、そのまま二階に上がりカーテンを引いて急いで横になった。

池田縫子、二二歳。昭和一九年（一九四四年）八月から、長崎の三菱兵器製作所大橋工場に女子挺身隊員として働いていた。大橋工場はまもなく原爆の強烈な爆風によって跡形もなく壊滅し、勤務していた女子挺身隊員のほとんどが死亡する。

「自宅で仮眠中にピカッと赤色か、青色かとわからぬほどの強烈な光を受け、ハツとして首だけをもたげた私の身体の上を、ゴオーツと物凄い風が過ぎていきました。慌ててモンペをはき、階下へ降りようとなりましたが、降りるより落ちていったと記憶しています。モンペの中から血が流れ出し、両方の大腿に数十個のガラスが突き刺さり、抜いてみると鋭い角度のガラスの破片をミシン針のようだと感じながら、抜くかたわら赤チンを縫って手当をしました」

縫子の自宅は、長崎市中心部の長崎駅から一キロほど南、県庁など官庁街から少し離れた西小島町（にしこしままち）にあった。「ファットマン」と名付けられたプルトニウム型の原爆は九日一二時、市中心部から二キロほど北に流され、浦上空で炸裂した。自宅は爆

心地からは三キロメートル余の地点だった。

縫子の実家は市の中心部円山町で江戸時代から続く油問屋「池田屋商店」。父は放蕩で店を潰してしまい、一旗あげて店を再興するため「満洲」に行っていた。その仕送りと縁故があったのだろう、縫子の母が世事に疎い「円山の置屋のお嬢様」であったにもかかわらず、市街地からそれほど離れていない場所に二階建ての借家を借りることができた。

縫子は男三人、女三人の六人兄妹の次女であったが、長女は既に嫁に行っており、長男はビルマ戦線、次男は予科練、三男はまだ六歳で、縫子が一家の柱であった。家にいたのは母と幼い弟、二人とも無事だった。女学生だった妹も幸い家にいたが、爆発のあと防空壕に入ったまま出てこない。

駆け下りてきた階段は爆風で外れ、ほとんど垂直に立っている。どうやって下りてきたかもわからなかった。ガラスの刺さった腿の傷は、いつまでも残り消えることはなかった。

「大橋工場へと救援に向かいました。県庁の青銅の屋根から十数本の白い湯気がゆらゆらと立っています。とても美しく感じられたことを覚えています。通り過ぎポオッ」と音がする。後ろを振り返ると青銅の屋根は火の海でした。私が見たのは県庁の燃え出す寸前の状態だったということです。長崎駅まで来ますと赤、黒ともうもうたる土ぼこりが立ち込めていて、中には一步も入れない状態で、恐ろしくなつて帰宅をいたしました」

家の前の道を長崎の都心部で被爆した人々が、自宅を目指して次々と通っていく。誰も一言も話さない。原爆の熱線は深部まで届き、血管を破裂させる。被災者は皆深い熱傷を負い血だらけである。夕方近くになって、近くに住む同僚のSさんが駆け込んできた。「工場が大変なことになってー、みんな救援に行つてほしかつて」

「もう一度工場へと出かけました。午後四時頃だったと覚えています。寄合町を下りますと、下から赤いダルマさんが歩いてくる。すれ違ったときに見ると、赤いと思つたのは、上半身の皮膚が火傷でむけてしまつて丸裸の状態でした。ズボンもほとんどなくベルトだけ、頭、顔も血だらけです。私はその人に声をかけました。『どこへ行かれますか』『東小島に帰っていくのです』。しっかりとした声でした。この傷では五分か一〇分持つかないと考える私、普通では歩くのも無理な傷でここまで歩いてくる…」

長崎市には成人男性はあまり残っていない。残っている成人男性の多くは、必要最小限の公務員や軍需工場の管理者、軍の兵站・管理要員などである。彼らの中には軍服や国民服ではなく、背広とネクタイで職場に行き、自宅に帰ってくる者もいた。なぜかこれまで長崎市には空襲がなかった。そんなこともあって、長崎市には戦時中とは思えない「普通のサラリーマンのお父さん」の生活も残っていたのである。縫子がこの時会つた「赤いダルマさん」のような男性に

はそんな雰囲気があったと言う。家族が心配で、なんとしても帰ろうとしたこの父たちは、あのきつい坂道を登って「家」にたどり着けたのだろうか。

大橋工場は壊滅していた。凄まじい爆風で押し潰され、熱線で焼き尽くされていた。工場のあった一帯には瓦礫が平らに積み重なり、何本かの鉄柱がかりうじて立っていただけだった。六尺旋盤らしき機械の下敷きになった人の体らしきものもあったが、自分たちではどうしようもなかった。Mさんの首だけが裏山で見つかったことを、しばらくしてSさんが教えてくれた。

「あの時勤務を交代しなければ、私がこうなっていた。Mさんも班長に雇われていなかったらこんなことになっていなかった」と縫子は思った。「池田さんは丈夫やけん」と、いつも大柄の縫子をからかっていた班長の遺体は結局見つからなかったと言う。

この日、挺身隊の若い女性だけでなく、少年たちも爆心地近くの工場で働いていた。当時一七歳の松瀬信子さんは三日後の八月一日、二歳違いの弟を探しに両親姉妹と城山町の三菱電機長崎工場に来ている。城山の工場は大橋工場よりさらに南、爆心地に極めて近いところにあった。探し求めた信子さんの一五歳の弟の遺体は、火葬された遺体の中からかりうじて見つかった。

「男の子が二〇人ぐらいと上司の人が二、三人集まっていたので、父母がその人達に弟の事を聞きますと、上司の方が、九日の日に生徒の

三分の一ぐらいは運動のため、市外に出ていたとの事で、実習に残る生徒はノートに名前が控えてあると言われ、見てもらったら、弟の名前が書いてあったそうです。ペチャンコになった工場の下敷きになり大勢の友達と死んでいるのです。(中略)

一メートルぐらい低いところに、材木を交互に上に何段も積み重ねて、その上に並べて焼くのです。名前が判っている子供は、名札を死体の前に建ててあるんです。知らないおばあさんが声を出して泣きながら孫を探しに来たが、工場の下いると言われたとただらうろするだけでした。孫の父親は兵隊に取られているので、孫が死んでいると申し訳がないと話してくれました(中略)

私は、手が見えたと大声で家族に叫びました。弟かも知れない、無我夢中で板切れを取りのぞきました。やっと両手と顔が半分見えましたが、弟ではありませんでした。手首をつかんで引き出そうとしましたが、材木の重みで駄目です。ところが、私の両手のひらに、その子の皮膚がちぎれて貼りついていました。(中略)

死体を確認して火葬してあったのですが、横向きにして半分焼けていたので、母が顔をよく見ますと、弟だったので材木を拾い集めて泣きながら火葬して来たと話をしてくれました。何かにつけて弟の事を思い出しては泣いていた母も四年後亡くなり、父も後を追う様に亡くなりました」

〔「原爆、忘れまじ」第四集 松瀬信子さん「続悲しい出来事」〕

生き残った人々は壊滅した地域に救護に向かい、行き別れた肉親

がいる人々は家族を必死に探した。この時、放射能をおびた粉塵が、生き残っている人の体内に取り込まれていることを誰も知らない。

「三日ほどして、母と小さい弟の身体の調子がおかしくなってきたので、島原へ連れていくことになりました。熱が出て、身体がダルイ、ダルイと言いつつ出した。その上に、母は髪の毛が抜けると言います。島原は買出しに行ったおり、時々お世話になった宿屋です。弟を背にして、母の手を引っ張り、道の尾付近まで来しました」

縫子の妹延子は、被爆後防空壕から出ようとせず、食事も防空壕で取ると言い張った。仕方なく縫子が一人で、体調の悪い母と弟を島原まで連れて行くことにした。島原には父がいた頃から行きつけにしていた旅館があった。自宅から市街地を抜けて北に向かって歩き始めた。道の尾は行程のまだ半分にもならない場所である。

「その時どこから来たのか覚えがありませんが、一人の男の人が『アイゴー』『アイゴー』と泣きながら、私達の側を通っていくのです。私を見て『お嬢さん、お水をいっばいください』と頼んでくるのです。それはたどたどしい日本語でした。顔は血がこびりつき、傷口にはウジがうごめいているのです。身体も上半身火傷をしていて、お尻の所へ板をあて、両手に形の違った下駄をかませ、両手の火傷でドロドロ口になっている皮膚が下駄の鼻緒にくっついていました。そして、いざりながら歩いています」

被爆したのは「日本人」だけではなかった。当時の長崎市には朝鮮半島や台湾、中国から渡ってきた人々が数多くいた。また長崎駅の近くには捕虜収容所があり、撃墜されたB二九の搭乗員など連合国の兵士も多数いた。

その中で最も数が多いのは朝鮮半島出身者である。被爆直後の死者のうち一割以上が朝鮮半島出身者であった。(広島一八・八%、長崎一三・五%)雇用や結婚など「移住」が最も多い(六一・二%)のだが、日本で出生した子供達(一九・八%)や「徴用」(一六・八%)も数多く含まれている。

私は思わず水筒の口をあけました。その時、母が私の手を押さえ「今この人に水をやったら死に水になる。もう少し先の長与という所に救護所があるから、そこでせめてもの傷の手当をしてもらえるかも知れないよ…」というのです。

その頃はすでに、原爆にあった人達に水を飲ませると、すぐに死んでしまうということを聞いていましたし、長与の救護所も知っていました。開けようとした水筒の口を閉じ、歩きだしました。訳を話してあげることができなかった。

その時、その男の人は空を見上げ、大粒の涙を流し、大きな声で、「アイゴー、アイゴー」と泣くのです。その声、その顔、今もって私の頭から離れないのです。

戦争の目的は「敵」を殲滅するか、屈伏させることである。広島と長崎に投下された原子爆弾は、非戦闘員を主な対象にした、敵国の市民に恐怖や自己否定によって闘うことを諦めさせ、自らに服従させることを目的とする非人道的で残酷な大量破壊兵器である。それはまさに「戦争」そのものを体現している。

被爆者は、破壊の凄まじさを体験し「死の恐怖」を感じただけでない。多くは、肉親や友人を助けられず、助けを求めている人々に「何もできなかった」「見捨ててしまった」ことを後悔し、「自分だけが助かった」と深い自己否定感に苛まれたのである。

川の中へ逃げ込もうと思って線路を通ると、枕木が燃えていました。四、五歳の女の子が桃色に全身ただれ『お姉ちゃん助けて!』としがみついて来ました。恐ろしくて逃げました。あの子はどうなったでしょう。か。(長崎 直爆 一・五km 一四歳女性)

一瞬にして倒壊した家屋の下敷きになって焼死した母の姿が、今でも眼底に焼きついている。(略) 目鼻の前におおいかぶさった建物におさえつけられたままで、じりじり迫ってくる火の手、そして死の瞬間を待つ気持ちといったら、どんなに苦しいことだったろうか。なぜもっと頑張つて救い出そうとしなかったのか、自分も一緒に死ぬ気になつたらもっと何かできたのではないか、母の死に対する罪意識はつきない。(広島 直爆 一・五km 一六歳男性)

被爆当時二一歳であった縫子は、終戦後名古屋の男性と結婚し二四歳で長男孝を生む。翌年には年子の長女咲子が誕生する。縫子はその二人の子供たちに自分の被爆体験を語った。

暑い夏の夜が来るとまだ幼い二人の子供たちは、蚊帳の中で母の話を聞いた。話している母の表情は悲しげだったが、話し方はつい昨日あったことのように鮮やかであった。そして眼はいつも子供たちにはなく、蚊帳の上に向けられていた。

縫子は子供たちに名古屋に移り住みことになった理由を語ることほとんどなかった。被爆のことはもちろん、長崎出身であることさえ、家族や親族以外に話すこともなかった。いつの間にか、縫子の口から長崎弁を聞くことはなくなっていた。

痩せて小柄の長男孝は病弱であった。月に何度も、縫子は孝を連れて「井上医院」に通った。「井上医院」は自宅からずいぶん離れたところにあったが、名医と評判の女医さんがいた。長女咲子の片足の指は六本あった。縫子はそれを気にして、いつか手術を受けさせたいと思っていた。咲子か孝を背負い、背負えないもう一人の子の手を引いて頻繁に医者に向かう縫子の姿は近所でも評判になった。酒浸りの孝の父親は家に帰ることが少なく、子供たちを連れていくのはいつも縫子一人だった。

縫子が初めて自分が長崎の被爆者であることを世間に明らかにしたのは、それから十数年後のことである。長男の孝は成人し、北海道大学（北大）の学生になっていた。

縫子は札幌地方裁判所の証言台で、孝のために自分が長崎の被爆者であることを証言した。

第一章 「極北」の闘い

一、一九六九年四月一日

記憶というのはいつまでも同じままではない。忘れたくないはずの大切な記憶も、いつの間にか角を削り落として辛うじて維持されていたようだ。そして記憶の多くの部分は徐々に薄れていく。記録されなかった多くの事実は、こうして時が奏でる「喧騒」の中に消え去っていくのだろう。

北大時代の古い友人広野から便りが届いた。孝はそれを読みながら、北大に入学した後の五〇年以上前の古い記憶を辿った。忘れていたことだけでなく、見逃していたこと、そして目を逸らしていたことが少しずつ姿を顕してくる。

「北大闘争は、様々な質を持つ特異な活動であったと思っています」
(広野からの便り)

一九六八年（昭和四三年）四月、北大の入学式は、教養部前の体育館で厳粛に行われた。

正面の壇上には「日の丸」が掲げられており、この大きな日本国旗は、これほど規模の大きな式典に、おそらく生まれて初めて出席した若者たちを圧倒した。体育館の周辺には新入生の父兄も数多くいる。ほとんどが畏まった服装をしており、一様に誇らしげな表情である。

北大は、北海道に住み人々にとって光り輝く「最高学府」だった。

札幌駅の近くで小さな会社を営む家の長男広野は、この年現役で北大文類に入学した。

当時の北大は、医学部、歯学部、水産学部を除く、文系の四学部（文学部・法学部・経済学部・教育学部）と、理系五学部（理学部・農学部・工学部・獣医学部・薬学部）が、それぞれ「文類」「理類」という大きな枠で一括して入学試験を行っていた。「文類」に合格すれば、教養部の二年の間に、文学部・法学部・経済学部・教育学部のどの学部に進むのかを決めることができた。もちろん、法学部のように人気のある学部は希望者が多く、希望すれば必ず進めるわけではない。選考は教養部での成績によるので、入学できたからといってウカウカしていると希望学部には進めない。

しかし、広野はのんびりしていた。将来の自分の姿はまだぼんやりしたままだった。

翌一九六九年（昭和四四年）の北大入学式は「粉碎」された。

三〇名ほどの学生たちが、四月一〇日の入学式当日、早朝六時一〇

分くらいから入学式会場である体育館を占拠し、当直者を追い出して机や椅子で封鎖してしまったのである。占拠した学生の半数以上は、一年前に北大に入学した教養部二年になったばかりの学生たちだった。

広野と孝はその学生達の中にいた。

不意を突かれ大学当局は慌てた。「封鎖を解いて直ちに退去しなさい」「君たちの要求は何だ」と学長らしき人物が、入学式のために準備した大きなマイクで、体育館に立て籠る学生達に呼び掛け、話し合いを求めてきた。

「その話を最初に聞いたのは昨年亡くなったＴ氏で、『少々お待ちください』というバカ丁寧な返事をした」（同じく共に体育館にいた友人進藤の手紙）

しばらくたって中から小さなハンドマイクでされた答えは素っ気ないものだった。

「退去は拒否する」

体育館の中から回答した学生の声は「冷たく落ち着いたかすれ声」であったと、地元紙の北海道新聞は伝えた。しかし、体育館の中では、どう答えるのか、いったい誰が答える役をするのかを決めるのに時間がかかっていた。

「誰もやらなければ自分でやるか」

早朝、体育館の前でどう入ったらいいのかわからず皆が一瞬たじろいでいた中で、ドアのガラスを角材で最初に叩き割った時と同じだった。

「パリーン」ガラスが割れる音は鋭く澄んでいたが、マイクで答えた孝の声は緊張でかすれていた。

「我々の要求は我々の行動が示している」

いったいどの誰が、どんな理由で、何の予告もなく入学式を「粉碎」したのだ、入学式での挨拶を前日まで推敲していた学長の堀内は激怒したことだろう。「革新学長」の面目は完全に潰された。

報告によれば、体育館に押し入ったのは、研究者でもその卵ではない、入学したばかりで北大の歴史を何も知らない、まだ「無知で浅学な」教養部の学生によってである。これまで苦勞して北大の「民主化」のために努力してきた自分の顔に、チンピラ学生に泥を塗られた気分だったに違いない。

二年前の一九六七年に北大の学長になった堀内寿郎は「革新学長」と呼ばれていた。

一九六〇年代は『革新学長』誕生への道程でもあった。六二年の学長選では杉野目三選阻止に向けて職組の支持を受けた堀内が起ち、絶対優勢と言われたが四票差で敗北した。六六年にも杉野目の後継者古市二郎理化学部長に対して、堀内が職組の支持を受けて出馬した

がわずか一票差で負けた。しかし、古市が急逝したため六七年に学長選が行われ、堀内は三度目の立候補で勝った。大学制度改革案から二〇年後、改革派の学長が誕生したのである。

（国立歴史民俗博物館研究報告 第二一六集「北大闘争の位置と思想」河西英通）

当時、全国の大学や高校では入学式や卒業式が学生達の抗議活動で中止になることが頻発していた。「学問の府」と思われていた大学での研究や教育が、現実の社会で果たしている役割が根本的に問われていたのである。学問のための学問はもはや存在せず、研究や教育の多くは大企業や国家の利益追求に寄与するためであり、大学は格差や差別の上にふんぞりかえり、教育を通してむしろそれを補強する役割を果たしている、そして、そのこと覆い隠しているのが「学問の府」という一部研究者の幻想である、という主張である。何も知らず、考えずに入学し卒業する学生に問題を提起したい、というのがこれらの活動や闘争の根底にあった。

この主張は多くの北大の学生や教職員の気持ちに寄り添っていた。特に昨年入学した教養部二年の学生は、一年間の大学生活を通じて、北大が教授会・職員組合・大学生協・学生自治会の「大学人」によって巧妙に「支配」され、異論が排除されているように感じていたのである。この支配を支えているのが北海道の研究・教育の頂点に君臨し、北海道における「最高学府」としての北海道（帝国）大学に所属する選ばれし者たちⅡ「大学人」による「大学の自治」という不思議

な理念だった。

孝のように道外から入学した者にとって、それまで身近ではあまり聞くことがなかった「大学人」という言葉が、北大の自治会活動家たちの中で踊っていた。

当時、北大の学生自治会は全て日本共産党の青年組織である民主青年同盟の学生達によってほぼ牛耳られていた。学生自治会は「全員加盟制」で、入学手続きでは大学の職員が、新入生から有無を言わず授業料などと一緒に自治会費を徴収していた。

新入生には自治会と大学当局は一体のように見えた。

孝が入学した六八年、ドイツ語の最初の講義に登壇したのは教官ではなく教養部自治会の活動家だった。彼は入ってくるなり新入生を前に演説を始めたのである。

「君たちの先輩としてこれからの大学生活で大事なことを訴えにきました。ヘルメットをかぶって暴れている輩は『全学連』を名乗っています。それは偽物です。『全学連』は『全日本学生自治会総連合』というのが正式名称で、全国の学生自治会のほとんどが加盟している我々の組織が正当な全学連です。あの連中は自治会とも全学連とも無縁の連中です」

「ナンセンス！」新入生の一人がするどい大声で叫んだ。

「全学連は『ゼンガクレン』、人々の先頭で戦争に反対して懸命に戦う学生たちのことだ。ベトナム戦争に反対して血を流して戦っているのは彼らだろう。そんな時に、『正式』とか『正当』とか、そんなことに意味も興味もない。ドイツ語の授業のはずなのにおかしいだろう。帰れ！」

「ナンセンス（異議がある）！」という言葉に「それはおかしいだろう！」という真つ当な気持ちが素直に込められていたに違いない。痩せてひ弱そうに見える学生の発言だったが妙に迫力があつた。そして何人かの新入生が続けてこの「先輩」を鋭く批判した。自治会の活動家は「今まで新入生にこんなことを言われたことはなかった」というような表情で、一言も反論できず教室から寂しそうに出て行った。「大学人」とか「大学の自治」という彼らの大切な理念が、今年の新生たちがこの大学に携えてきた「情念」と見事に乖離していることを、この活動家は知らなかった。

そして、発言した学生たちは、自分の「言葉」が思っている以上に力を持っていることにはじめて気がついた。「言葉」が相手を圧倒し、一時的にでも屈服させることができれば、「言葉」は「武器」になるのだ。最初に発言したのは孝だった。

一九六九年四月一〇日の入学式は中止になり、新生たちは教養部本館内で分散して堀内学長の「聞き取りにくい祝辞」を聞いた。体育館を占拠した学生たちは三時間半後、入学式の中止を確認して自ら

退去した。孝は封鎖が自治会系の学生たちによって「暴力的」に解除されなかったことに安堵していた。実は、孝たちが占拠している間、北大三派と封鎖に加わらなかったノンセクトの学生たちは、体育館前で自治会系の学生や職員の包囲の中で集会を開き、実質的なピケットラインを張っていたのだ。

「我々の要求は我々の行動が示している」

四月一〇日の「入学式闘争」は、おそらく、この間しばらく、北大では誰からも発せられることがなかった、言いたくても言えなかった「異議申し立て」だった。

二、フンボルトの亡霊たち

堀内寿郎学長は、入学式のために用意していた挨拶を体育館ですることはできなかったが、その代わりに四日後、「全学に訴える」と題した長文の告示を出した。

しかし、この告示は必ずしも「全学」のすべての人々に宛てられたものではなかった。明らかに「大学の自治」を信奉する「大学人」にだけ宛てられたこの告示が呼び起こしたのは、封印されていた様々な北大の過去の「亡霊」たちだった。

「大学の使命は、研究と教育を通じて、人類社会に貢献することにある。この使命達成のために大学の自治が、必要不可欠であることが、数世紀にわたる経験の集積から学びとられ、教官、学生の一致した改革への努力によって闘いとられたものである。北大の現体制には幾多の欠陥がある。これらの欠陥は改革によって除かれなければならない。しかし、暴力によって破壊しなければ良き体制は生まれない。暴力によって破壊すれば良き体制が生まれる。という二つの命題は右記及び左記に事実によってそれぞれ反証されている根拠のない、しかも危険極まる教条である。去る十日入学式を暴力でもって破壊しようとした者が根拠なき教条をまに受けていたとすれば、立証された命題と根拠なき教条と区別しえない頭の弱さにある。この弱さは、我国の研究教育全体の後進性を特徴づけている。この後進の故に彼らは権威を攻撃しながら、別の形の権威を無批判に受け入れている。学者、研究者と呼ばれている人々の中にも大学改革によって厳しい学問の世界が出現するのを嫌って、手段として暴力学生を「支持」する者も現れるであろう。

学内の現れた暴力学生の行動は、私が三十五年前に目のあたりに見たナチ御用暴力学生の行動と軌を一にする。但しこの場合は、原因は後進性よりは苛酷なベルサイユ条約による窮乏した生活の内に、ヒットラーに幻想させられたバラ色の夢にあった。しかし、十九世紀の初めからドイツに確立されていた学問の自由が生み出す学問の厳しさ嫌った所謂学者の一団が、すぐれた外国人、並びにユダヤ系

学者を追放して厳しさを骨抜きにすべく、ナチスと結託して暴力学生を走狗としていた史実を想起させる。こうした破壊によりフンボルト以来営々と築き上げられた世界学術の最高峰は一挙にして転落し、三十五年後の今日に至るまで回復していない。この史実は、前述命題の明白な反証である。我々は前者の徹を踏むまい。大学破壊の暴力は許してはならない。教職員、学生、院生は一致団結して、暴力による大学の破壊から我が北大を守り抜こうではないか。」（四月一四日 学長告示）

「頭の弱い学生たち」が「教条的な間違った革命理論」に影響されて、「学問の府」を破壊しようとしている。まわりくどい表現の、長いだけでなく文法的にも問題のある悪文だが、学長の言いたいことは明白だった。

この断固とした姿勢に自治会系の学生たちは安堵した。学長の論調は、普段読んでいる共産党や民青の機関紙の論理と基本的に全く同じだった。そして学内の新旧の党活動家たちは、北大でかつて共産党組織を牛耳っていた「所感派」や、唐牛たちの「社会主義学生同盟」の姿を思い浮かべていた。「教条的な間違った革命理論」はかつて党を破滅寸前まで追い詰めた。この轍を決して踏んではならないのだ。

堀内学長の告示によって、ナチスの暴力学生という「フンボルトの亡霊」だけでなく、「山村工作隊」や「安保ブント」の封印されていた過去の革命運動の「亡霊」が北大に蘇った。

二週間後の四月二六日、学長は新たな通達を出した。通達は二種類あった。最初に出された通達は一旦各学部配布されたが、短時間で訂正された。正式文書として残っているのは訂正されたものであるが、学長の本音が訂正前のものにあることは自治会系の学生たちにはすぐ分かったはずだ。

「教職員に告ぐ（訂正前…教職員、院生、学生諸君へ）」
今北大では、一部の学生集団がバリケード封鎖をする動きをみせています。

このような行動は大学の自治にとって危険であります。
全学の教職員の団結によりかかる行動が未然に防止されるよう祈念します。

（訂正前…全学の教職員、院生、学生の団結により、かかる行動が排除されることを祈念します）（四月二六日 学長通達）

動いたのは学生大衆に普段「暴力反対！」を唱えている自治会系の学生たちだった。

革命は議会でも多数をとることだけでは達成できない、反革命勢力が「暴力」を行使するなら、「革命」は「暴力」で断固として守らなければならない。「二段階革命論」と「敵の出方論」を信奉していた彼らにとっては当然の判断だった。

北大の理学部は自治会系の学生たちによって「占拠」され、防衛の

ための「バリケード」とヘルメット、角材などの「武装」が準備された。入学式闘争に参加したノンセクトの「学部反戦」の学生は、理学部内にもはや立ち入ることができなくなった。

学長通達は「言葉による暴力」だけではなく、もう一つの「暴力」と「排除」を呼び起こしたのだ。

この時期、北海道の網走刑務所で熱心に差し入れの『赤旗』を読んでいる受刑者がいた。「白鳥事件」で有罪判決を受け服役していた村上國治である。

村上は獄中日記に「暴力学生」たちへの怒りをぶつけている。村上にとって「暴力学生」は、「白鳥事件」に関与しながら党と自分を「裏切った」北大生の姿と重なっていたに違いない。

「白鳥事件」には多くの北大生が関与していた。「裏切り者」の亡霊が現れたのだ。

『赤旗』を読み、暴力学生は次第に孤立を深めているようだ。没落階級のコンプレックス、ジェラシー、あせりであり、無能な没落階級の息子のやけっぱちが暴力学生の姿だ。サラリーマンになってもほとんど役に立たず、「授業粉碎」を叫びながらその影ではレポートを提出している学生もいる、という。まったくふぬけ、なまくら能無しインテリの標本が暴力学生の正体であろう。（『網走獄中記』）

入学式から七ヶ月後の一九六九年一月八日、北大に三〇〇〇人の機動隊が導入され、孝を含む本部に立てこもって抵抗した五名の学生が逮捕された。

一方、村上國治は封鎖解除からほぼ一週間後の一月一四日出獄した。まるで逮捕された五名の学生と入れ替わったようであった。しかし、逮捕された学生たちは「白鳥事件」の村上がまだ網走の刑務所で入獄していることなどは知る由もなかった。

機動隊の導入と本部及び各学部のバリケード解除によって、北大闘争は程なく終焉するだろう、と北大の大多数の学生や教職員は思った。確かに、バリケードが解除され、北大から「暴力学生」が排除され、授業が再開されれば、かつての秩序が戻るのかも知れない。「全大学人」の団結によって、「学問の府」「学術の最高峰」は守られ、「北大の権威」は戻るのだろう。しかし、少なくともそれは「今ではない」、本部で闘っていた学生たちと、その戦いと連帯して闘おうとした全共闘の学生は思った。なぜなら、「我々はまだ、今闘っている」からだ。

早朝始まった一月八日の攻防は昼までに終わらず、本部のバリケードは機動隊に突破されていなかった。内部に嚴重に積み重ねられていたバリケードからは黒煙と紅蓮の炎が出ていた。

北大闘争は終焉するのか、それはいつなのか、この時それがわかっていない者はいなかった。又わがろうとした者も数少なかった。

いつも闘いの前線にいた広野は、逮捕された孝たちの「救援対策」を行うため『救対（Ｑ）』の活動に参加する。この頃『救対（Ｑ）』は「後方部隊」と思われていたが、やがて闘いの前線になる。

「本部闘争は、一見本部バリケードの陥落で終了したように見えませんが、本当は、そこから別な異次元の闘争が始まっていました。裁判闘争です。これには苦労しました。今まで批判してきた「資本主義社会のルール」である「法律」上の手続きに従わなければならないからです。いつも議論のテーマになったのは、体制側の裁判所に何をどのようにどんな言葉で主張していきけるのかということでした。我々の言葉は法律家には通じず、法律家の言葉は我々には法律上は理解できても、闘争上何の意味があるのかは理解不能でした。」（広野からの便り）

三、一九六九年一月八日 “北のトリデ”

北大の封鎖解除は全国的な「事件」であった。北海道内の新聞だけでなく、全国紙にもこの「事件」の記事が掲載された。特に本部から出火し、建物が炎上したことは大きな「社会ニュース」として取り上げられ、新聞だけでなくテレビやラジオでも報道された。た

だ不思議なのは、それらの報道が、当初から「学生による放火」と断定し、その詳細な「手口」まで伝えていたことだった。

二月八日の『毎日新聞』東京版には、攻防の生々しい状況と併せて、早々と詳細な「出火の状況」が掲載されている。事件当日の夕刊である。記事の締め切りは学生たちが逮捕された午後〇時四〇分のたかだか数時間後のはずだ。

北大の封鎖解除 学生本部に放火して抵抗

・・・学生側は本部三階に通ずる階段を封鎖していた机やイスなどに重油をかけて放火、抵抗した。

(一九六九年一月八日『毎日新聞』夕刊 東京三版 一面)



狂った“北のトリデ”の抵抗

黒煙を上げる本部 機動隊三千に投石、火炎ビン

・・・屋上にたてこもった五人の決死隊にガス銃が撃ち込まれ、放水が浴びせられたが、コンクリートで玄関はがっちり固められ、要塞化した建物は学生たちの投石と火炎ビン投下に阻まれ“城攻め”は予想どおり難攻を続けた。

本部前のざんごうに築かれたバリケードが屋上からの火炎ビンで一斉に燃え上がり、荒廃し切った建物が真っ赤な炎に照らし出され無残な光景を描き出した。

放水車が本部正面玄関に向かった。この放水車の屋根で火炎ビンが突然火を吹いた。これを合図に屋上から一斉に火炎ビンが投げられ、本部周辺は火と煙に包まれた。機動隊はこれに対して放水車三台を先頭に放水したが、屋上の決死隊は身を乗出しながらレンガや火炎ビン、硫酸を投げつける。

たまりかねた吉田事務局長が「封鎖中の学生諸君、今すぐ封鎖を解きなさい」と警備車の上からマイクで呼びかけた。すかさず一般学生から事務局長に「おまえこそ退去しろ」とば声が飛んだ。

午前十時四十七分、一階に隊員三十名が突入、学生らの激しい抵抗を受けながら約一五分で解除した。続いて二階も同様解除したところ、三階に通じる階段を封鎖していた机などに学生側が重油をかけて放火した。

このため火は一時燃えあがった。重油は二階にもこぼれたので二階も一部を焼いた。三階からは黒い煙をあげており、ハシゴ車が出動して消火にあたった。

また機動隊は屋上に立てこもる五名の学生に対し「危険だからハシゴ車でおろろ」と呼びかけた。学生たちは投石などの抵抗をやめ、東側の電車通りに向かって整列、マイクで演説、肩を組んでインターを歌っていた。

(一九六九年一月八日『毎日新聞』夕刊 東京三版 一面)

この記事のニュースソースはどこにあったのだろう。外から見える攻防戦の様子はともかく、外からは窺い知れない内部の詳細な状況の情報ソースは、内部にいた警察官以外に考えられない。果たしてこの短い時間に、本当に記者は内部に突入した警察官を取材し、なおかつ「ウラをとった」のだろうか。

「玄関をコンクリートで固めた要塞」の屋上にいる学生たちは、「(警察の)予想どおり」抵抗をやめなかった。機動隊員三〇名は、(どこから入ったかわからないが)本部に「突入」し、一階から二階に通じる階段(ビッシリ机やロッカーが積まれ、丁寧針金などで連結してあるはずだが)を「屋上から下りてきた」学生たち

の「激しい抵抗」を物ともせず、これを(カッターなど使わず)わずか「一五分」で取り除いた。さらに二階から三階への階段も同様に(あつという間に)取り除いたところ、どこからか重油を持ってきた学生が階段に火をつけた、というのだ。そして、(おそらくこれが最も重要だが)学生たちは抵抗をやめた。

広く知られているように、こうした公安事件の報道内容は概ね警察が流す警察発表によっている。一月八日の北大封鎖解除の詳細な内部状況がその警察発表であるとする、警察には既に詳細に描かれた上のような「ストーリー」があつたに違いない。このストーリーを「入手した」からこそ、夕刊に間に合う「状況が目に見えよう」な記事」が書けたのだろう。

もちろん、逮捕され勾留された五人の学生たちは、新聞が本部闘争をどのように報道しているかなど知る由もなかった。本部建物から出火した時の状況は、この記事とは全く異なっていたが、それを知っているのは、逮捕されバラバラに分断された五人の学生たちだけだった。

孝の母縫子は、息子の逮捕をテレビのニュースで知ることになる。「あつ、お兄ちゃんだ!」孝の中学生になったばかりの弟が、テレビの画面で、機動隊員に連行され消防車の梯子から下ろされる姿を見て叫んだ。見ていた家族は全員黙り込んでしまった。

孝が学生運動に加わっていることは、家族全員が薄々知っていた。特に縫子は購読していたグラフ雑誌の表紙に孝を発見して以来、そのことを確信していた。東大の封鎖解除を特集したそのグラフ雑誌の表紙には、縦に白い太線が入った鮮やかな赤色のヘルメットを被り、タオルで覆面をして、片方に目を描いた厚紙を貼った眼鏡をかけた孝が大きく写っていた。マジックで手書きされた

「SEI」は「孝の字」だ。タオルは正月に帰省した孝に渡した見覚えのある三色の新品のタオルだった。そしてその時何よりも心配したのは、孝の眼鏡の右レンズが割れて、その代わりに目を描いたオレンジ色の厚紙が嵌められていたことだった。

孝の七歳違いの弟は、小学校に入る前、外で遊んでいた時の事故で左目を失明していた。「兄弟二人揃って失明したら」そのことを考えると縫子の胸は張り裂けそうだったに違いない。

しかし縫子は、正月帰省してから会っていなかった孝が「生きていた」ことだけで安堵した。

四、一九六九年一月一日 東大列品館

一九六九年一月初め、東大キャンパスは騒然としていた。安田講堂など多くの建物が全共闘の学生たちによってバリケード封鎖さ

れ、まもなく安田講堂などには機動隊を導入されることになっていた。

帰省していた孝は、封鎖解除前に少しでも全共闘の学生たちの手伝いをするつもりで札幌に帰る途中東大に入った。当時一番シンパシーを感じていたのは社会主義学生同盟（社会学同）マルクスレーニン主義派（『ML』派）という政治組織だったので、とりあえずこの組織の学生部隊「学生解放戦線」に合流することにした。

眼鏡のレンズは、その「学生解放戦線」の「武闘訓練」で割れた。訓練相手の鉄パイプが孝の顔を直撃した。間一髪、思わず顔を引いたのでレンズだけで済んだのだ。

封鎖解除直前の東大のキャンパスは一樣に殺気立っていた。

ML派は封鎖解除の際、安田講堂手前の列品館という建物で機動隊を迎え撃つことになっていた。激しい攻防が予想されるこの建物に残る人員が不足していたのだろうか、孝はいきなり列品館にたてこもるよう要請された。学生部隊の正式な構成員でもなく、それまでその派の集会に出たこともない、ただか「シンパ」の一年生にである。

孝は迷った。追い詰められ、緊迫している東大の闘いに外人部隊として参加し、闘いに殉ずるのもいいかもしれない、それが一瞬頭をよぎった。

しかし北大には仲間たちが待っていた。帰ったら北大の状況をどう変えられるかを議論する仲間たちの「合宿」も予定されていたはずだ。孝をはじめ、どこの政治組織やその学生組織に所属していない「ノンセクト」の教養生たちを中心に、「教養クラス反戦」という「集団」が作られていた。孝は「自分の大学でやることはありません」と断り、封鎖解除が予想された一月一八日の前日に、少し申し訳ない気持ちを抱えて東大を離れた。

ここは自分のいる場所ではないのだ。どこなのかわからない地図が表紙に載った『アデン、アラビア』を持って、孝は上野駅から急行列車に乗って青森に向かった。札幌に着くと、孝はまもなく二〇歳になる。

ぼくは二十歳だった。それがひとの一生でいちばん美しい年齢だなどとだれにも言わせまい。

一歩足を踏みはずせば、いっさいが若者をだめにしてしまうのだ。恋愛も思想も家族を失うことも、大人たちの仲間に入ること。世の中でおのれがどんな役割を果しているのか知るのは辛いことだ。

(ポール・ニザン『アデン、アラビア』篠田浩一郎 訳)

列品館では予想された以上の激しい攻防があり、学生側にも多数の重傷者が出た。そして攻防の中で出火し、全共闘運動の中では初めての「現住建造物放火罪」が適用された。

刑法第一〇八条

放火して、現に人が住居に使用し又は現に人がいる建造物、汽車、電車、艦船又は鉱坑を焼損した者は、死刑又は無期若しくは五年以上の懲役に処する。

母の縫子は「救対」からの連絡であらためて息子の逮捕を知った。

正月で帰省した時もすっかり痩せ細っていた。手紙で「眼鏡が壊れたけど、心配ない」と連絡をしてきて以来、夏休みにも帰省しなかった。滅多にかかってくるのがなかった電話は夏休み以降、どこからかはわからなかったが時々かかってくるようにはなった。電話はいつも一方的に必要なことだけ話して切れる。「そんなに心配することないからね」が電話を切る時の決まり文句だ。しかし心配と不安で縫子の胸はいつも張り裂けそうだった。

逮捕された五名の内四名の学生は、一九六九年二月三〇日、「現住建造物放火」など五つの罪名で起訴され、翌年の五月まで拘留される。「二一・八北大本部裁判闘争」が始まった。

五、あなたたちが火をつけたでしょう！

翌一九七〇年二月、第一回目の公判が開かれた。そして公判は一九七一年七月弁護側最終陳述が終わるまでの一七ヶ月の間に三九回開かれた。平均してもほぼ月二回以上、当初の検察側立証段階では週一回を上回るペースで一氣に審理が進んだ。

被告たちが勾留されたままの反証は困難を極めた。事実が充分わからないうちで弁護士の反証方針は抽象的にならざるを得ず、被告人等により冒頭陳述は法律的な争点とは噛み合わない「叫び」に過ぎなかった。しかし、被告たちは自分たちが単なる「暴力学生」として片付けられてしまうことに心の底から怒っていた。

「法律論としても、検察側は、現住建造物放火罪の成立に多くの力を割いています。凶器準備集合（結集）罪、公務執行妨害罪、住居不法侵入罪は、それぞれ現行犯なので、有罪の成立は疑いもなく、その動機として全共闘運動を主張出来たわけです。」（広野の手紙）

二月八日の機動隊導入時に、本部横にある図書館に立てこもり一時間半ほどで逮捕された学生たちが所属する革命的共産主義者同盟（革共同）革命的マルクス主義派（『革マル派』）は、裁判闘争を準備している全共闘や「救対」に対して「統一公判」の申し入れをしていた。北大闘争の中で全共闘やクラス反戦を「原則的な自治会

運動を放棄した『裸踊り』『岩波新書』程度の理論しかない『ナシセンス・ドジカル』など激烈に批判していたこの政治党派との「統一公判」を、孝を始め被告たちは誰も望んでいなかった。「救対」は、拘留されている被告と家族との対応、裁判の準備と同時に、この申し入れを断ることに苦慮していた。

公判の担当は札幌地方裁判所第五部（渡部保夫裁判長）だった。

渡部は刑事部一筋の、厳格に法を適用する裁判官、また簡単に「警察」を信用しない裁判官として有名であった。しかし、一方で渡部の法廷内の「秩序維持」は強権的で、訴訟指揮は異常なまでに強引であった。

そして何よりも、渡部の「暴力学生」に対する「予断」はあからさまだった。「何をするかわからない連中」と身構えているのが被告席からもありありと感じられた。被告が一言でも発言すると、「発言の機会は後で保証されている。黙りなさい！」と強く警告された。傍聴席からの発言には特に敏感に反応し、即座に「退廷」が命じられた。不思議なことに、このベテランの刑事事件担当の裁判官が、「求釈明」という刑事訴訟法上の基本的な手続きを飛ばしてしまい、被告の一人から「注意」されるほど慌て、急いでいたのだ。

渡部も「暴力学生」の亡霊を見ていたのかもしれない。

公判の日程は過密だった。公判では、少なくとも北海道の直近の公安裁判では例を見ない「荒れる法廷」が現出した。

第一回の公判時には不思議な「ハプニング」が起きる。審理が始まるとまもなく「あなたたちが火をつけたでしょう！ 私は見てました！」と傍聴席から一人の若い女性が叫んだのだ。学生とは思えない女性だったが、裁判長から静かに「退廷しなさい」と言われて素直に退廷した。被告席の被告たちは、いったい誰が、何のために、そんなことを言いにはわざわざ傍聴に来たのかわからなかった。孝は「権力が動揺を誘うために送り込んだのか？」と不思議に思ったが、一般市民が義憤に燃えて、わざわざそのことだけのために傍聴に来た、とは全く思わなかった。しかし、「何をするかわからない暴力学生」の亡霊を見ていた渡部裁判長には「あなたたちが火をつけたでしょう。私は見てました」という叫びが「心証」に強く刻み付けられたのかもしれない。

この裁判は当初から「現住建造物放火罪」成立が最大の目的であったのだ。

「しかし、放火罪は実行行為者の特定が欠かせません。何故なら、失火かも知れないし、突入した機動隊員による過失の可能性すらあり得るわけです。・・・それを特定する為に、被告達の分断と孤立を画策したのですが、当時の弁護士や救済も気が付きませんでした。」（広野の手紙）

審理は「荒れ」続けた。三月に開かれた第三回公判で、公判日程の過密さだけでなく、保釈請求の却下をめぐっても弁護士から厳しい抗議が行われ、それに傍聴席の学生たちが立ち上がって呼応した。「ナンセンス！」裁判長は「退廷！」と叫んだが、抗議をやめない学生たちの拘束を廷吏に命じた。そして前代未聞の「二七名もの監置処分」が下された。

監置（かんち）とは、法廷等の秩序を維持し、裁判の威信を保持することを目的とする「法廷等の秩序維持に関する法律」による監置場への留置をいう。期間は二〇日以下であり、過料が併科される。監置の裁判は決定とする。

同法による監置および過料は、従来の刑事的・行政的処罰のいずれの範疇にも属しない特殊な処罰である。同法による監置および過料の裁判をするに当たっては令状の発付など憲法の要求する手続が適用されず、証拠調べを義務づけていない。

名古屋から出てきた縫子は、孝と久しぶりに、この法廷で「会う」ことができた。傍聴席は全共闘の学生たちでいっぱいだった。孝と一緒に逮捕された進藤の父母、武智の母親も来ていた。

家族たちも退廷を命じられたが拘束はされなかった。縫子は生まれてはじめて国家の「権力」が行使される状況を目の当たりにした。「権威」が脅かされる時、「権力者」は躊躇いなく「力」を行使する。

北大で起きたことと全く同じことが縫子の目の前で起きたのだ。縫子はいつの間にか、学生たちのシュプレヒコールに唱和していた。

「被告を奪還するぞー」「裁判闘争に勝利するぞー！」

実はその頃、四人の被告たちにも「奪還」しなければならない大切なものがあつた。しかし、その時はまだ、すぐ近くにあるそれがいったい何なのか、わからずにいた。「奪還するぞー」というシュプレヒコールを遠くに聞きながら、被告たちはまたもやバラバラに分断され拘留所の独房に戻された。

六、一九六九年夏 教養部バリケード封鎖

北大闘争、特にその発火点となった「入学式闘争」は、北大当局と自治会系の人々にとっては許すことのできない「大学の自治」に対する「破壊活動」であつたが、それ以外の北大関係者の多くは、この闘いを「教養生の未熟な行為」と受け止めていた。だがしかし、この闘いのどこが、どのように「未熟」なのかを、闘った学生たちに直接指摘した人は数少なかった。「権威」以外の方法で、彼らに影響を与え、動かす方法をそれまでの世代はおそらくまだ誰も知らなかったのだ。「入学式闘争」を闘った彼らは「権威を疑う」ことを教えられ、

「権威あるものでも間違っているなら従う必要はない」と信じたおそらく最初の世代だった。

北大には多くの「亡霊」が住んでいた。自らの「民主主義革命」を守り、過去の「革命運動の亡霊」と戦うために「暴力」をいち早く選択した日共民青だけでなく、それ以外の政治潮流に属する人々、そして無党派や大学当局に批判的な教員や助手・院生も、皆それぞれの「亡霊」を見ていた。「権威」の陰から姿を現したのは、さまざまな人々が見る「亡霊」だった。

ノンセクトの闘い、特にノンセクトの学生のみで行われた「体育館占拠闘争」は、高校生並みの「未熟な闘い」と、北大のほとんどの政治組織（『党派』）、そして「大人」と呼ばれた教官の多数もそう考えていた。不思議なことに、この「入学式闘争」を反発も含めて、真正面から受け止めたのは、むしろ北大に入学したばかりの新生たち、そして北大を目指しながら入学できなかった浪人生たちだった。しかし、最初に動いたのは、さまざまな「党派」だった。

一九六九年六月二八日未明、大学本部や主要学部から遠く離れた教養部の建物が、六〇名ほどの部隊によっていきなりバリケード封鎖された。封鎖したのは赤ヘルメットの「社会主義学生同盟（社学同Ⅱ『ブント』）」の部隊であつた。全道から動員された北大以外の学生や高校生、浪人生、そして労働者も含まれていた。

実はこの封鎖には「背景」があった。ブントを含む革マル派以外の三派は、五月に行った本部建物のカンパニア的（象徴的）封鎖を、日共産党およびその青年組織である民主青年同盟（『日共民青』）の「軍事組織」に実力で解除され、「駆逐」されていたのだ。

本部封鎖解除では教養部闘争委員会（『C闘委』）や学部共闘会議（『学部共闘』）も三派の学生たちと共に、「武装」では各段の差があった日共民青の「軍事組織」と戦った。C闘委にとっては初めての本格的な「ゲバルト」だったが、無鉄砲にもその先頭で戦っていた。この戦いでは多くの負傷者が出たが、その多くはC闘委、学部共闘の側だった。北大で登場したことがなかった「盾」がこの時初めて登場した。投石も容赦がなかった。これまでのように威嚇的に投げる小石ではなく、レンガなどが顔面を狙って投げられた。

ともあれ、民青の姿勢は厳しかった。すでに五派連合や革マル派は国家権力の「補完物」「反人民的刃」であると断じていたが、五派連合が学連による封鎖解除を暴力的だと非難している点に対して、「理性的な話し合い」を拒否した五派連合は「大学に存在する必要はないし、又社会的にも抹殺される以外にない」と強烈な反批判をしている。

さらに教育学部院生協議会も次のような暴力論を展開した。「一般的な暴力否定では通用しなくなった段階、大学自治を破壊する暴力を否定する為に“暴力”を用いなければならぬ段階にまで事態が進

展していたこと、それだけ、大学自治が危機に陥っていた」。

（「北大闘争の位置と思想」 河西英通）

「二〇〇一年度に退職したある教員は紛争時について、「“全共闘”に對抗した勢力が軍隊組織として行動していること」を回顧している。千葉誠哉「北大を去るにあたって」『北大時報』第五六四号、二〇〇一年三月。」

（「北大闘争の位置と思想」註（二二二） 河西英通）

ただしこの封鎖解除は、日共民青の自治会系学生にとっては予期せぬ結果を生んだ。普段「暴力反対」を唱えていた彼らが「暴力学生」以上に暴力的であり「過激」だったことが白日の元に晒されたのだ。教養部では各クラスから「弾劾決議」が上がり、彼らを擁護する大学当局に対しても「ストライキ決議」が上がった。久しぶりに成立した教養部の学生大会では民青系の自治会執行部が、北大自治会史上初めてリコールされた。

ブントにとっては、本部封鎖解除で失った闘争の主導権と「メンツ」を回復する絶好のチャンスが訪れたのだ。秋からの「決戦」に備えて、北大での「主導権」を守らなければならない、そして何よりも物理的な闘争拠点を是が非でも確保しなければならない、北海道の三派の中では最大の勢力を誇っていたブントにとって、この目的を実現する格好の場所がこの北大教養部だった。全道から動員した「外人部隊」で、教養部の闘争当事者であるC闘委の意思をも無視して、

未明いつきに封鎖を強行した。

もちろん事前に当事者のC闘委にまったく相談しなかったわけではない。しかしそれは「相談」ではなく「指導」であった。事前に「オルグ」と称してC闘委の主要な活動家に説得を試みたが、その内容は「封鎖闘争に参加しろ」という恫喝に近い「指導」だった。この封鎖闘争にはブント以外にも構造改革派の共産主義労働者党（『共労党』）の学生組織の活動家なども加わっていた。孝は封鎖の何日前、共労党の教養生高田から封鎖闘争に賛成するように説得された。

ただ三派のうち社会主義青年同盟解放派（『解放派』学生組織は『反帝学評』）はブントの封鎖強行には加わらなかった。C闘委のほとんどの学生が反対しているのを知り、むしろそれを擁護し、ブントの横暴と闘っていた。

解放派は教養部の中だけでは活動家の数が他の二派より多かった。特に六九年入学の新入生や浪人生では解放派の活動家が主流だった。それは六八年入学した活動家の個人的力量や人間性に拠ったのだろう。解放派は六八年まで、北大では数人しか活動家がいなかった。弱小党派であったが、この年入学した活動家たちが組織を拡大し、ブントや中核派に匹敵する党派にしたのだ。

それと当時の解放派の「理論」は全共闘運動の「思想」と不思議と重なっていた。解放派は新左翼のほとんどの党派が「マルクス・レーニン主義」を標榜する中、レーニンと対立しレーニンから批判され

たドイツの革命家ローザ・ルクセンブルクの理論や行動を評価していた。「党建設より評議会（コミューン）運動を」、全共闘の結成を北大で最初に提起したのは解放派であった。

五派連合のなかでいち早く全共闘結成を提起したのは反帝学評である。四月末から五月にかけて、「大衆的全共闘運動」の構築をかかげている。

（「北大闘争の位置と思想」 河西英通）

またこれら「三派」と言われた党派にとっても、北海道は特異な地域であった。一九六八年夏、三派によって作られていた「三派全学連」は方針をめぐって分裂し、「中核派全学連」とそれ以外の党派による「反帝全学連」に分かれていたが、北海道では党派間の争いはほとんどなく、「和気あいあい」と言ってもいい雰囲気であった。東京の戦いに疲れ、半ば逃亡するように戻ってきた党派の活動家でも、北大に戻るとどの党派の活動家からも労われた。中央で始まっていた党派内部での激しい党派闘争とはまだ無縁のように見えた。

しかしこの党派闘争の波はすでに北海道に届き始めていたのだ。こうした中で自治会系学生による暴力的な「封鎖解除」は、各党派の活動スタイルを劇的に変えるきっかけになった。「スターリニスト」の亡霊が目の前に白昼堂々と現れたのだ。その「スターリニスト」に「駆逐」されたままでは組織の存在そのものが危機に陥る。

「ブントは教養部封鎖に反対する C 闘委の活動家を「日和見主義者」と厳しく糾弾し、反論には威圧と暴力で応えた。教養部のブント活動家も封鎖に反対するものが多かったが、封鎖後教養部に向かったこれらの教養部のノンセクトおよび三派の学生は「封鎖の賛成か反対か」と問われ、「賛成」と答えない者は入ることができなかった。教養部のブント活動家だった菅野は、この時封鎖を行なった北大ブントの指導者小田に殴られ怪我を負った。C 闘委の女性が見かねて治療をしたが、これまで教養部内で C 闘委のノンセクト活動家と共に中心的に活動し、先頭で闘ってきた菅野は北大闘争から去り、二度と仲間の前に現れなくなった。

ブントは春以降大きく変貌していた。組織内部でも抗争があったのだろう、これまで教養部生と親しくしていた、教養部のすぐ裏に恵迪（けいてき）寮のアジトにいた学部のブント活動家の多くが、活動の場からいつの間にか消えた。

北大ブントの中では理論的に最も優秀な活動家と言われていた山下は、中央の指導部に引っぱられたという事で、代わって経済学部の小田が北大ブントの指導者になっていた。小田はノンセクトの学部反戦の一員として「入学式闘争」にも加わっていたが、オルグされてブントの先鋭な活動家に「変貌」していた。穏やかで、理論的に納得できないことにはことのほか慎重だった小田は、全く別人のようになった。新入生の頃に入っていた「北大新聞会」で山下を知っていた孝は、小田をオルグしたのは理論家の山下だと思った。

大学に入学し、時間の経過と共に次第にいつぱしの活動家として熱をあげていく中で、私は一度、招集された「学対会議」というのに代理で参加したことがあります。私が属していた社会主義学生同盟という政治組織の指導部が学生対策として、各大学の組織責任者や中心的活動家を集めて闘争方針や活動方針などを討議、伝達する会議といえます。

その時に、北海道大学の学生で学対の指導部成員となっていたという人を知りました。その会議で熱弁をふるった彼は、そのまま私の大学の過激サークルとして名を馳せていた「現代思想研究会」（かの有名な重信房子さんが事実上の責任者）の部屋に顔を出し、熱心に教えを垂れていたことがあります。痩せてはいましたが、精悍そのもので今もはっきりと記憶に残っています。

「今迄、哲学者は、色々と世界を解釈してきたのだが、大切なのは社会を変革することなのだ!!」とマルクスの有名な言葉をひきあいに熱弁をふるいました。その一字一句が、私の真白な脳裏にしっかりと刻み込まれました。

それから三十余年、生徒であった私は、今のいまでも、その教えを実践していかんと努力していますが、その高説をたれ私を実践活動にふるいたたせた張本人は、今どうなっているのでしょうか。

（『嗚呼!! 任侠ボリシエビキ』田中義三）

この時、孝も小田に殴られたらしいが全く覚えていない。そんなこ

とよりしなければいけないことが山積みだったからだろう。C 闘委の中でも「分裂」が起きていた。

七、C 闘委の「中間総括」

本部封鎖解除はC 闘委の学生たちにも大きな衝撃を与えた。「理性的な話し合い」を拒否した五派連合は「大学に存在する必要はないし、又社会的にも抹殺される以外にない」という日共民青の姿勢は、大学当局の本音をあからさまに表現している、とあらためて確信させた。実際封鎖解除した屋上には、自治会系の学生たちだけでなく、明らかに大学当局者と思われる人物が並んで立っており、全共闘系の学生を見下ろしていた。そしてその横では、抗議する学生たちに石を投げ下ろす人物もいたのだ。「封鎖解除」は当局公認であり、目的は単なる封鎖の「解除」ではなく異端者の「追放」と「抹殺」なのだ。

C 闘委のノンセクトの学生たちは自治会系の封鎖解除に対してクラス討議を組織し、大差で弾劾決議をあげていった。また一体となっている大学当局への抗議をストライキ決議として表現した。ほとんど成立することがなかった教養部の学生大会が成立し、民青が牛耳る自治会執行部はリコールされた。C 闘委は、問題提起型の「入学式闘争」から脱皮する手掛かりが初めて生まれたと感じていた。

しかしその中でブントによる教養部の封鎖強行が一方的に行われた。党派の横暴や「引き回し」に失望し、闘いの現場から去って行く者が何人も出てきた。一方で、自治会系の意図が「追放」と「抹殺」であるなら、それと直ちに立ち向かう以外ない、躊躇はできないと考える者もいた。議論はすぐにはまとまらなかった。

一方、ブントの単独封鎖は教養部内を徐々に変え始めていた。教養部の教室や教官室が「荒れ」始めていたのだ。特に「外人部隊」の狼藉は目に余った。C 闘委は何度も議論をし、「直ちに合流し、封鎖に責任を持つこと」を決定した。

確かに「告発」は「告発」のままでは何も生まないのだ。C 闘委は、合流した後、まず教養部の「自主管理」を始めた。また「バリケードにいる者なら誰でも参加できる自由な議論」の場を設定した。「全体会議」と言われたこの話し合いは、ほぼ毎日続いた。ブントは「全体主義会議」と揶揄し、いつも単独の秘密会議を行った。その時間になると小田が「あかー、ヘルメット軍団のしょーん」とマイク放送を行なったが、いつの間にか会議は開かれなくなった。外人部隊を主力とした社会学部の部隊は少しずつ減り、夏休み明けには教養部からほとんどいなくなっていく。

C 闘委は夏休みに入って一〇日間、集中的な「理論合宿」を行なった。これまでの闘いをどう捉えて今後どこへ進むのか、真剣で生真面目な議論を行った。そしてこれを「北大闘争中間総括」と「自主講座運動」の二冊のパンフレットにまとめた。

この「中間総括」に対しては、一部の無党派で当局に批判的な教養部の教官たちが応えた。当局はもちろん、当局に批判的であっても、学部の教官や何らかの形で党派に関わっていた教官たちはほとんどこれを無視したようだ。「未熟な入学式闘争」を行なった教養部の学生たちの「未熟な言葉」で書かれた総括には興味がなかったのだろう。ここにも「権威」が陰をおとしていたのだろうか。

状況への強いいられた追従は、いま切断されなければならない。そのためには圧力集団から変革集団に転質せよ、と呼びかける声が『総括』の中から聞きとれる。この転質とはいったいどのようなことなのか。

――しばしば、北大闘争は東大・日大闘争に較べて質がおちる、と言われる。

『総括』もその批判を受け入れた文脈で書かれているふしがある。しかし私は、そうは思わない。質がおちるのではなくて、異質である、と思う。それは、北大の先輩たちが苦勞と工夫を重ね、積みあげてきた革新の諸成果、これを「水」にたとえるなら、その水の中を北大闘争という魚が泳いでいる有様である。しかし、『総括』では、この水への留意が残念ながらあいまいである。そのうちに水は涸れ、魚が死んでしまいはしないか。変革集団への転質とは、この「水」に留意することであり、東大・日大闘争をお手本に質を「深める」ということではない。そのような深め方によつては、北大闘争の外在性が見え隠れするばかりであろう。∴「水」に留意するとは、あの

転質への意欲をあくまで北大状況の中で客観的に機能させることである

『北大新聞』 六九・九一五 奥山次良『All Power To the People』
――『北大中間総括』を読んで

ここでは戦後北大における「革新の諸成果」、「北大状況」を絶やさぬことが「北大闘争」の永続化、「転質」にとって必要であり、東大・日大闘争との「異質」化の力ギであることが示唆されている。しかし、現実的には「水」の中から「魚」は飛び出していった。

(「北大闘争の位置と思想」河西英通)

北大にはかつて「イールズ闘争」という東大・日大闘争にも匹敵する誇るべき闘いがあった。また「白鳥事件」には多くの北大生が関与していた。しかしC 闘争の学生たちは、この「イールズ闘争」や「白鳥事件」が、「入学式闘争」から始まった北大闘争の大切な「手本」や「教訓」になるかも知れない、という認識はこの時なかった。北大の学生運動の歴史の中に自らの闘いの現在を位置付ける余裕などなかったのだろうか。

ちなみに「中間総括」はこんな一節で終わっている。

ねえ君、理論は灰色で、緑に萌えるのは、生命の黄金の樹だ(レーニン)

（「レーニン」と書かれているが、実はレーニンが著作で引用したゲーテ『ファウスト』からの孫引きである。レーニンもまたゲーテを愛読し、一九一七年に国外に逃亡した際にはネクラースフの詩集とともにゲーテの『ファウスト』を携えていたという）

C 闘委のノンセクトの学生たちは、ここでも、自らの闘争の総括をレーニンの言葉で飾ろうとした。本当は、何も飾らず、レーニンでもゲーテでもない自ら自身の言葉で、「今ここにある問題」として語らなければならないかったのだ。C 闘委もいつの間にか「マルクスレーニン主義の亡霊」を見ていた。革命を指さない「大衆」と呼ばれることを「恐れ」、必ずしも「マルクス・レーニン主義」を完全には信じていない自分を「弱い闘争主体」と感じていたのだろう。

「水」の中から「魚たち」は飛び出そうとしていた。C 闘委や学部共闘だけでなく、三派の学生たち、そして民青の学生たちさえも。

へ、『And I Love Her』

北大教養部は広い大学の北端にあった。本部、農学部、理学部の重厚な建物や、文系四学部、工学部の当時としては近代的な建物とは違って、三階建ての安易な作りの校舎で、大学というより高校のそれ

に近い、ただ広いだけのコンクリート造りの味も素っ気もない建物だった。

この教養部に全学生の半数近くが「収容」されていた。各教室だけでなく、教官たちの部屋も簡素なものだった。教養部は、北海道大学のイメージとはかけ離れた、まるで大きな予備校のような存在に見えた。実際、この教養部の成績で、移行できる学部が決定した。就職に有利な人気学部に移行するにはまた競争して「勉強」しなければならない。「大講堂」と呼ばれた体育館のような大きな教室ではまるで大手私立大学のような「マスプロ教育」が行われた。

大学闘争で明らかになったのですが、教養部は校舎も学部と離れていて、学内でも差別というか、冷遇されていました。教員についていえば、研究条件など学部とは差別されていたし、大学運営についての決定権もありませんでした。

（『風の吹きわける道を歩いて』花崎皋平）

この広い教養部建物の「封鎖」を維持するには大きな「力」が必要となった。しかし夏休みに入って帰省する者が出てきたこともあって封鎖に加わる者は減ってきた。また、バリケードの維持に汲々とする活動は、これまでのC 闘委の活動スタイルを大きく変えてしまった。クラス討論やクラス決議を重視し、批判はもちろん、参加するかしないかも自分で決める、かつて「クラス反戦」の活動スタイルは大きく変わり、そのことに嫌気がさして、闘争から距離を置く者も

出てきた。自由闊達だった「クラス反戦」は崩壊しようとしていた。

教養部の入り口に作られたそれほど強固でないバリケードは、クラスという開かれた空間の中で生き生きと活動していた。C 闘委の活動家たちを、異なる価値観や意見とはや出会ふことのない、狭い「閉ざされた」空間に閉じ込めてしまった。

また教養部の党派の活動家にも大きな変化が出てきた。全国の学園闘争の「陰」で、凄惨な党派間、及び党派内の抗争が始まり、それは後戻りできないほど激化していったのだ。東大安田講堂の攻防戦の前後、駒場で行われていた革マル派と解放派の主導権争い「青解・革マル戦争」は、この後新左翼党派を破滅させる「内ゲバ」の凄惨さと虚しさの始まりであった。安田講堂の攻防戦という輝かしく見えた「光」の後から、深い「陰」がやってきた。

「同じ東大におりながら、かたや本郷で籠城戦を目の当たりにしている状況、かたや駒場で革マルと消耗戦（無益な戦い）をしていたのだ」と改めて思い返しました。」

（同じクラスの友人で解放派廣田のメール 二〇二二年）

バリケードでは夕方になるとブント小田の「あかー、ヘルメット軍団のしょくーん」という独特のイントネーションで始まるマイク放送があり、その後孝たちは毎日のように「全体会議」を行った。会議で分担を決め、夜遅くまでビラ作りや「立てカン」と呼ばれた大きな看板を作った。そして何よりも、夜になるとバリケードの「防衛」

が必要だった。

バリケードに C 闘委が加わってしばらく後、理学部にたてこもる自治会系の学生たちが教養部にデモをかけてくるようになった。ヘルメットを被り、角材などを持って、「ふーさ（封鎖）解除」「ふーさ（封鎖）解除」と掛け声をかけてやってきた。人数は教養部に泊まり込んでいる「防衛隊」より多く、「武装」の質も C 闘委のそれを上回っていたように思えた。

三派の「防衛隊」がいて泊まり込みの人数が比較的多かったので、孝たちはバリケードから反撃に出て、自治会系の部隊と中央道路上で対峙をした。おそらく北大闘争に火炎瓶が登場したのはこの時だろう。威嚇するために対峙している相手部隊の前方に向かって投げたのだ。

ビンに布をつめそれに火をつけて投げるタイプの火炎瓶は「不発」が多かった。誰かが『球根栽培法』というかつての武装共産党時代のパンフを持ち込んで作った新しいタイプの火炎瓶は、もう少し「マシ」だった。投げて瓶が割れた後しばらく火がつかないので、「不発」と思った相手が動き始めた瞬間火が付く。火が出ると最初は「わーっ」とクモの子を散らすように相手の隊列が乱れた。威嚇の効果が高かったようだ。

日本の学生運動の「伝統」なのか、いつも「武器のエスカレート」は党派間や党派内の抗争から始まる。北大も全く同じだった。夜が明けて誰もいなくなった中央道路を、孝は一人で掃除をした。ガラ

スの破片が気になったからだ、やけに虚しいことをしている気がしてため息が出た。

孝が一月東大闘争の応援に入った時、全共闘のほとんどの部隊が駒場の学生大会に出かけ、もぬけのカラになった安田講堂の留守部隊になったことがあった。その時もやはり日共民青の部隊がデモをかけてきた。安田講堂前の広場の向こうに、白か黄色のヘルメットを被り腕組みをしてこちらを傲然と見ている大きな男がいた。安田講堂のバルコニーから石を投げてみたが、投げた石は男に届かず、コロコロ転がって足の手前で止まった。男は「ニヤリ」と笑っていたような気がした。あれが噂の「あかつき行動隊」だと孝は思った。

ところが、こうした批判や非難の影で、党内で密かにわれわれを評価する者もいた。党中央の連中である。評価と言っても「早大や中大、法大の連中はなかなかやるじゃないか」という、要するに暴力装置としての評価である。・・・

だが頭のいい奴ほど一度暴力装置を握ると、それに頼るようになる。かくて、党中央の評価と私ら一部の者の気楽な考えが幸か不幸かクロスし、“あかつき行動隊”の結成に至った・・・

(『突破者』宮崎学)

孝は帰省しなかった。バリケード封鎖が長引くにつれ、バリケードに泊まり込む者はだんだん減ってきて、帰るに帰れなくなった。そ

してとうとう「あかつき行動隊」の亡霊が北大にも現れ、明け方まで起きている昼夜逆転の生活が続いた。北大の三派活動家の中には、北大闘争だけでなく、党派の活動そのものから離れていくものも増えてきた。C 闘委はいつの間にか、これまで党派の活動家が担ってきた「政治闘争」の部分まで背負うことになった。C 闘委のビラに、少しづつ「安保粉碎」というような勇ましい文字が踊り始めた。

夜になると、孝がバリケードに持ち込んだ孝の宝物であるSONYのトランジスタラジオから『And I Love Her』が流れた。音楽番組のオープニングテーマだった。そのギターの旋律を聞くと、孝は、自分が安田講堂の上から投げられた、誰にも届かずコロコロ転がっていった小さな石になったような気がした。

九、「自主講座」とバリ祭

教養部の封鎖闘争には「陰」の部分だけではない、眩しい「光」の部分があった。封鎖闘争をきっかけに様々な動きが出てくる。特に教養部に新たな「場」ができたことで、「自主講座」などのこれまでできなかった新しい動きが始まった。

・・・注目されるのは、自主講座である。七月に以下のような講座が

開講されている。

「怪談の裏面」「疎外論」「討論会 反大学の思想」「或る大学教官の告発」「映画 日大闘争の記録」「西ドイツ社会学同の運動形態について」「自然科学の意義と責任について」「仏・五月革命における学生と労働者階級」「北大闘争と労働者階級」「ヘーゲル哲学の概観」「フォイエルバッハ、マルクスの思想」「科学者運動」。最終回到討論集会がもたれた。自主講座運動はベ平連の北大闘争への「主体的参加の第一歩」であり、「これまで、四、五、六月において北大闘争の解説者であり、討論集会の司会者であり、『さあ』 封鎖学生の意見を聞きましよう』という形であった。さらに“一般学生からは、民青と五派連合のゲバルトの中に入って、仲裁をするもの”としてとらえられていた時点から、一步脱皮したものであった」と総括された。自主講座には毎回一〇〇〜一五〇名の参加者があったが、「大衆に対するサービス機関」化という反省も出された。クラス反戦連合系の教養部闘争委員会も九月から一〇月にかけて自主講座を開いている。

（「北大闘争の位置と思想」 河西英通）

またC 闘委の学生たちの中に、これまでの党派の運動にないような全く新しいスタイルの動きを始めるものも出てきた。何の規制もない自由な自主学園祭は「バリ祭」と名付けられた。C 闘委で最も「お洒落」だったフランス語クラスの「F 共闘」大崎が中心だった。しかし、北大で開かれた最初の自主学園祭、「バリ祭」の資料は残されていない。

九月、夏休みが明けると学生たちが戻ってきた。C 闘委の学生たちには「中間総括」と「自主講座運動」のパンフレットが渡された。教養部一年生のクラスからはいくつかの反応があった。

・・・ある学生はこう自問自答する。「現在の僕達にとって何が『一般教養』か?」「……答えは明白である。それは授業に戻って『勉強』するのではなくて、討論(集)会、自主講座等で、自分にとって『一般教養』とは何か、どうあるべきか、まさにそれをじっくり考え、もう一度捉え返してみることである」。

（「北大闘争の位置と思想」 河西英通）

このビラを書いたのは、この年入学した教養部一年の松村だった。

「私の入学後入った恵迪寮の部屋に、藤野、高山という釧路出のクラス反戦が居て、そこから進藤、館野、そして岡戸(孝)と知り合った(バリの中でも)。

こちらはわけあって二浪で多分同じ年?と思っていた

九月の授業再開『策動』になって、クラ館前にクラスで(文責小生で)、ビラとそれと同文のタテ看を出した。人が結構集まり見ていた。そのとき岡戸(孝)が、感謝・評価半分、皮肉半分で『民青がこれなら一緒にやれると言った』と言って来たのをよく覚えている。

ビラの内容は、一断片知識の教養部批判、二教官の批判精神の欠如、

三試験単位制粉碎、四学生の参画機会がない、それと『車の故障は走行中は直せない』だった。」

(当時教養部一年のクラス反戦松村のメール 二〇二二年)

タテ看板を見てどんなことを言ったのかは覚えていなかったが、松村のメールで、教養部封鎖の「行き先」を懸命に探していたC闘委の姿と、孝が抱えていた「恐れ」を思い出した。孝は安田講堂攻防戦後のバリケードの状況はうすうす知っていた。残った東大共闘駒場(東大教養部)のノンセクト学生は、大学構内から追い出されるか、党派に囲い込まれていたのだ。

(二月)一八・一九の後、東大駒場の全共闘は、占拠していた第八本館から出ていくことになる。日共の本格的な攻撃が始まったからだ。民青は夜になると、兵器を使うようになっていた。兵器はピッチングマシンだ。昼間は一般学生がいるので使わないが、夜、学生が姿を消すと、ピッチングマシンを使って投石してくる。・・・その頃には、駒場のライフラインは停められていた。・・・そのうちに、「防衛隊を残して、あと全員は逃げる、外に出ろ」との指令が下った。防衛隊は青ヘル。・・・集合場所は明大の和泉校舎だ。明治大学はMの拠点だった。・・・

(『東大駒場全共闘 エリートたちの回転木馬』大野正道)

自主講座に参加し、バリ祭を「楽しむ」余裕は孝にはもうなかった。

ブントの封鎖強行以来、党派との関係が大きく変わり始めていた。気心した教養部の三派活動家たちと一緒に、C闘委のメンバーがあれこれ議論しながら闘争方針を決めることはなくなり、C闘委が一つの「党派」として扱われ始めたのだ。孝はいつの間にか、戦術会議に出て党派間の折衝を行うことが多くなった。

一方、入学式闘争と一緒に闘った館野や進藤は、この自主講座運動を中心に担った。館野は理論合宿の成果を「自主講座運動」のパンフレットにまとめた。教養部自治委員会で一〇・八羽田闘争をめぐって民青系の自治会執行部と論争になった時、『朝日ジャーナル』をかざして「ここに書いてある」と発言し、党派の活動家からは「無理論のノンセクトラジカル」の代表格と言われ、「ジャーナル左翼」と揶揄された館野は急速な変貌を遂げた。また進藤は「自主講座」の企画や運営を中心で行い、C闘委の教育闘争的活動の「顔」になっていた。二人とも「北大べ平連」「教養べ平連」の中心メンバーでもあった。

「ところで、未開封の段ボールがもうひとつ出てきて、妻の保管資料と一緒に当時のビラ等も結構あり、その中に自主講座関係の資料が入っていました。・・・

私たちのビラ等の他にも、堀内学長の『大学改革の理念』上下のパンフや、北海道帝国大学制度審議会の『大学制度改革案』(昭和二十二年発行)なんてものも出てきて、当時からそれなりに大学改革について研究しようとしていた形跡もうかがえます。」

（C 闘委の友人館野のメール 二〇二三年）

批判も自由、闘争や行動に参加するかしないかも自分で決める、したがって行動のたびに参加者が変わり、人数は増えたり減ったりしたC 闘委の参加メンバーは次第に固定化し、ほとんど「指導部」と言える存在がなかったC 闘委に「核」になる部分が生まれたのはこの頃だった。同時にC 闘委が、徐々に北大闘争の「核」にならざるを得なくなっていたことを、C 闘委の誰もまだ気がついていなかった。

一〇、「日本で一番ゲバルトの弱い全共闘」

「夏休み」が終わり、大学当局は日共民青の「力」を後ろ盾に教養部の「授業再開」を目指した。学生自治会だけでなく院生協議会、職員組合、生協など力と日共民青が掌握している理学部などの建物を使って、教養部の授業を再開しようとしたのだ。「単位」を餌にし、「留年」を脅しにすれば「一般学生」は授業を受けに戻ってくる。そこには「一般学生」を巻き込んで全共闘を孤立させた東大闘争での「成功体験」があった。

しかし北大では必ずしも成功したとは言えなかった。屋上に黄色

いヘルメットの日共民青の防衛隊がいる建物で授業を受けようとする学生は少なかったのだ。またそれ以上に、これまでの大学当局のやり方や日共民青との癒着に、学生ばかりでなく教官たちも辟易していた。そして全共闘、C 闘委の学生たちの果敢な「授業再開策動粉碎」の闘いの影響は大きかった。農学部では公開の学部長との「大衆団交」が行われ、再開授業の会場にしないことが確約された。理学部以外のその他の学部でも再開授業の受け入れをせず、ほぼ唯一残ったのは自治会系の学生たちに「占拠」され、完全にバリケードで封鎖された「砦」のような理学部だけになった。

理学部前で繰り広げられた「授業再開策動粉碎」の闘争は、北大闘争の中でも最も「暴力的」な闘いの一つになった。自治会系の学生は、これまで一般学生の前では見せることのなかった自らの「暴力性」と「革命性」を白昼堂々と開示するようになった。「大学の自治と学問の自由を守る」という大義名分だけでなく、自らの「日本革命」の展望をかけて自治会系の学生たちも高揚していたに違いない。「トロツキスト」から大学を守るという彼らの逆バリケードは、自治会系の学生たちをも非日常で異形な「閉ざされた」空間に閉じ込めてしまった。消火用のホースを使った強力な放水だけでなく、屋上からは投石器を使ったと思われるような威力のある投石が行われた。おそらくC 闘委の活動家たちがゲバ棒から鉄パイプに持ち替えたのもこの時期だった。

「大学の自治と学問の自由を擁護する闘いは、最も鋭い反権力闘争であり、『大学解体』は権力の前で武装解除するにもひとしい」と論ずる。(民青文学部班)この点から描かれる大学革命路線は、「反帝反独占の民主々義革命による人民権力の樹立」↓「社会主義的変革への連続的發展による労働者階級の権力の確立」↓「人民の民主々義あるいは社会主義日本の大学」という道程になる。

〔北大闘争の位置と思想〕 河西英通



一方で全共闘・C闘委は討論集会を頻繁に行った。不思議なことに自治会系の学生たちはそれを「批判」し、自分たちの勢力圏ではこういった「討論集会」話し合いを陰湿に妨害した。それだけではなく、勢力圏には全共闘系の学生の「立ち入ること」さえ許さなかった。理学部の前を通り掛かっただけで自治会系の学生に取り囲ま

れ、拉致されそうになったC闘委の活動家もいた。頻繁に行われる討論集会の一方で、虚しい「陣取り合戦」が行われた。八月一七日には文系四学部が封鎖され、北大は全共闘と日共民青のどちらかの「占領地」のようになっていった。機動隊導入前の東大がそうであったように、全国の学園闘争、そして北大闘争は、殺気に包まれ、荒み始めていた。

八・二五 北大全共闘主催全学討論集会(約三〇〇名)

八・三〇 C闘委主催第一回教官学生討論集会(教官四〇余名、

学生約六〇〇名)

九・一 C闘委主催第二回教官学生討論集会(約四〇〇名)

九・五 全国全共闘連合結成大会に北大全共闘五〇名参加

九・一〇・一一 C闘委自主講座運動創造委員会主催公開連続

パネル討論

九・一二 C闘委主催全教養生討論集会

九・一七 C闘委主催全教養生討論集会

九 全共闘理闘委「理学部大衆討論会に総結集せよ!」

九・二五 C闘委による古河講堂(教養部仮事務室)封鎖

九・二六 C闘委主催パネル討論集会(約二〇〇名)

一〇・一・三 C闘委対抗講座

一〇・四 全共闘による旧教育学部棟(仮本部)封鎖

一〇・七・二五 C闘委対抗講座

〔北大闘争(紛争)に関するいくつかの論点〕 河西英通

九月二五日、医学部でも民青の自治会執行部がリコールされ、医学部の一年生（M一）は無期限のバリケードストに入った。五月二四日国会に上程されたいわゆる「大学立法」は自治会系の学生たちは最も大きな政治的課題としていたが、全共闘やC闘委にはそういった一つ一つの政策をめぐる具体的な政治的課題に目を向ける「余裕」はなくなっていた。三派などの党派は秋の闘いを「政治決戦」と位置づけ、「二〇・二一闘争」目前の目標とする「七〇年安保闘争」の大きな波のようなうねりにC闘委は飲み込まれようとしていた。

日共民青と並ぶ北大学生運動の一方の主人公、革マル派もこの時期「全学闘」を結成し「北大闘争」に本格的に「参加」する宣言を行った。夏休みが明けると同時に、北大学生運動の全ての「役者」が揃い、「北大闘争」は何処かに向かって一気に動き出した。

一〇月一四日、革マル派は安保粉碎北大闘争勝利全学闘争会議「全学闘」を立ち上げ、「我が『全学闘』は、この北大学生戦線の最強の部隊となるであろう」と宣言した。「全学闘」自体の存在はすでに四月段階で確認できるが、あらためてこの段階で「安保粉碎・北大闘争勝利」を前面化して、全共闘を上まわる決意で、学内のヘゲモニーを握ろうとしたものと思われる。

（「北大闘争の位置と思想」河西英通）

孝はいつも「ゲバルト」の場にいた。五月の封鎖解除で、五本の前

歯を失った孝はかえって怪我を恐れなくなっていた。屋上からの投石をもろともせず、何度も理学部の玄関に向かってデモをした。頑丈に防備されている理学部の正面入口突入できるはずはなかったが、まともな対応をせず、ただただ授業を再開しようとする大学当局と日共民青の癒着と、なりふり構わない姿勢が許せなかったのだ。屋上からの激しい投石で、自分が怪我をする代わりに仲間たちが次々と傷ついた。北大闘争が始まるまで、全共闘、特にC闘委のメンバーには「ゲバルト」の体験はほとんどなかった。C闘委の隊列の先頭には、同じクラスで新聞会でも一緒だった勝田のような「単ゲバ」と呼ばれた頼もしい活動家たちもいたが、彼らも次々と傷ついた。

自分の隊列からけ人が出たときの気持ちは自分が怪我をするより痛かった。先頭にいる自分に石は当たらず隣の仲間当たったのだ。そして傷ついた仲間が「ごめん、怪我をしたから後ろに下がる」という目で孝を見る。平和主義者でいつも穏健な進藤が「とうとう俺にも石が当たった」という顔をして血を流しながら下がっていった時は、「こんな戦い方で本当にいいのか」と思って泣きたくなった。

「九月に入り、理学部校舎で民青の防衛体制の下での教養部の授業が再開され、この阻止闘争がメインになり、北大闘争全期間を通して最も激しい武力衝突となった。

理学部屋上からの投石機による激しい投石に対し、全共闘は畳を頭上に載せて防御しながら投石と火炎瓶で応酬し、理学正面玄関への突入を図った。ここで二回負傷し戦線離脱したこともあり、どの時

点で何をもってこの闘争を切り上げたのか覚えていない。」

（館野の手紙 二〇二二年）

この頃からだろうか、北大全共闘は「全国で一番ゲバルトの弱い全共闘」と言われ始めていた。確かに、頑丈な建物に向かって届きもしない投石をし、圧倒的な放水の中、脅しにもならない火炎瓶を投げ、畳を担いで、投石の雨の中を無謀なデモをするような全共闘はいなかったに違いない。暴力の本質は相手を殲滅するか屈服させることなのだ。自らの組織のため、運動のヘゲモニーを握るためには手段を問わない「革命党派の本物の暴力」にC闘委は無自覚に対峙していた。

飛び出そうとしていた「魚たち」は、自分では気がつかないまま既に「水」の中から飛び出していた。これからは「魚たち」が「魚」のままではいられない、という予感に孝は身震いした。短い夏は終わり、札幌は既に「晩秋」のたたずまいであった。

一一、夜明けがやってきた

東大・日大闘争から始まった全国の学園闘争は徐々に、そして確実に終焉を迎えようとしていた。秋の「政治決戦」を前に「敗北」の雰

囲気が全国の学園闘争を覆っていた。それを振り払おうと九月「全国全共闘連合」が結成され、その結成集会が全国規模で行われたが、北大から集会に参加したのは党派の活動家を中心で、C闘委などのノンセクトは少なかった。そして、参加した数少ないC闘委の活動家たちは、この集会で高揚感をではなく、重苦しい焦燥感や重圧感を感じて帰ってきた。

北大全共闘は一〇月になってやっと正式に結成された。そもそも「全国全共闘連合」の結成に合わせて、党派の主導で急遽作られた「全共闘」だった。臍の緒を首に巻いて生まれた赤子のように、北大全共闘は生まれながらに窒息しようとしていた。

全国的にはかなり遅咲きの全共闘だったが（九大全学共闘会議準備会結成大会も九月三日開催と遅い）、全国全共闘連合の動きに呼応するものだった。九月五日に東京日比谷野外音楽堂で二万数千名を集めて開かれた全国全共闘連合結成大会には、北大全共闘から五〇名が参加している。

・・・北大新聞によれば、北大全共闘の正式結成は準備会発足から二か月近くも経った一〇月九日である。封鎖中の法文系軍艦講堂に二五〇名が参加して結成大会を開いた。
（「北大闘争の位置と思想」 河西英通）

北大闘争は「未熟な闘い」と言われ続けた。確かに、教養部の一、二年生が中心、一八歳から二〇歳のノンセクトの学生たちの闘いで

ある。党派からは「日本で一番ゲバルトの弱い全共闘」と揶揄され、学内の多くの教職員には無思想なノンセクト学生の「安易な」闘いと思われていた。

北大闘争の大きな欠点は、教養部の学生が中心で、みんなとても若かったのです。三十代くらいの大学院生とか助手とかが闘争を支える力が非常に弱かった。助手院生共闘という助手院生のグループもあり、東大はそれが強かったけれど、北大は弱かったですね。そのため全共闘の討論は、「大学をどう変えるか」の議論にまでは発展しませんでした。教育の問題にじっくり粘り強く取り組むには、あまりにも若くて未熟だったことがありました。（『風の吹きわける道を歩いて 現代社会運動私史』花崎皋平）

北大裁判で被告たちの特別弁護人になり、被告たちとともに裁判闘争を闘った、当時北大文学部助教授だった花崎皋平も北大闘争は未熟な闘いであり、その未熟さは「欠点」であると捉えていた。しかしこれには理由があった。北大闘争の「未熟さ」とその理由を、別の角度と視点から看破したのは当時北大教養部講師の田中利光だった。

で、諸君自身も、なるほど三項目要求のはらんでいる問題点は気付いています。たとえば、八月二十三日発行の教養闘争委員会の『中間総括』の指摘が僕の知るかぎりではもっとも鋭い・・・

「具体的に三項目要求の闘争は、五・二団交―五・一六学長団交と展

開されていたが、その闘争と結合する原則的活動、就中、クラス末端における活動が決定的に不十分であった。又、同時に、そのクラス活動でも三項目要求を『帝大解体』と単純に短絡させ、東大Ⅱ日大闘争を語ることによって、もっと痛烈に言えば、そのアナロジーとしての北大闘争―三項目要求としてしか展開しえなかったのである。これは、北大闘争をいかに現実的に運動として定着化していくのかといったことより、【東大・日大の突き出したもの】を盲目的に追いかけることを先行し、北大の具体的矛盾の突き出しと課題の設定が決定的に欠落していた結果である。」（『総括』一〇ページ上段以下）・・・

くりかえしになりますが、これは、「北大闘争」を主体的に担っている（僕）の知るかぎりでの自己批判のうちでは、もっとも良質な・鋭い・成熟したものです。それがまさに助手院生の方々によるのではなく、教養闘争委員会によってなされているところに、僕はなにかいいしれない悲しみを覚えます・・・

・・・まず、運動主体の質をうけつぐなんてことができるわけがありません。運動主体は一人一人において強固に形成されていかなくはならないでしょう。

それをする事なく（としか僕には思えない）、なにか、「北大闘争」が全国の学園闘争のひとつらしい体裁を整えているのは、【日大Ⅱ東大闘争】の残した遺産のおかげなのであって、それを継承して真実に発展させることもないままに、ただ食いつぶしているに過ぎない、

としか僕には思えないのです。

（『三項目の持つ意味』―その否定的側面―）北大教養部講師田中利光

確かに、「三項目要求」は、「入学式闘争」に対する対応で白日の元に晒された大学当局の「体質」を明らかにしようと「堀内Ⅱ日共体制打倒」という煽動的なスローガンと共に、党派との「調整」によって急遽作られた「要求」だった。孝は入学式闘争後の「戦術会議」に出ていて、その経緯をよく知っていた。孝たちC闘委が「中間総括」で「三項目要求」の問題点を自ら指摘したのには、教養部の封鎖の経緯だけでなく、こうした根拠があったが、このことを「総括」し「深めていく」ことは、孝たちにはもうできなかった。

「残念ながら、大学立法や大学当局の余りに陰謀めいた排除主義的な対応によって、全共斗運動も窒息させられはじめていまして、初期の生き生きとした感動は段々苦悩に満ちた憔悴に変質せざるを得ないようです。」

（高橋和巳の講演 一九六九・一〇・一〇 札幌大谷会館）

闘いや運動を「窒息」させようとしたものは、当局の陰謀や排除だけでなかった。

三派を含む「革命党派」のほとんどは、どのような闘いにも「正しい理論」に基づく「正しい方針」、そして何よりも間違いを犯しそ

な「大衆」を「指導」し、大衆運動を支える強固な「組織」が必要不可欠だとしてきた。当然「指導」する者は理論や方針を決して間違つてはならない。それはいつの間にか、間違いを犯す者は真の「指導者」ではないということになり、それぞれ内と外で理論や方針の「誤り」や「違い」を見つけ出すことに汲々とし始める。「正しさ」を競い始めるのだ。相互の批判は際限なくエスカレートしていく。

北大の革マル派も、これまでしばらく抑えていたノンセクト・C闘委に対する「批判」と「介入」を本格的に開始する。

・・・クラス反戦連合などのノンセクト・ラジカルは「単純破壊主義」とされた。・・・五派連合は自治会を学生運動の「場所」ととらえることが出来ず、そこから離脱しようとしている、それは「はみ出し運動Ⅱ裸踊り」・・・と批判している。

（「北大闘争の位置と思想」 河西英通）

革命党派の内部では、自らの理論や方針に反する者を組織や指導者の「権威」によって押さえつけ「排除」する。それはやがて内部から周辺、そして外部に広がり、いつの間にかそのために「力」が行使される。理論や方針をめぐる闘いは「力」と「力」の闘いになり、一旦始まった「力」の行使を止めることは、相手が屈服するまで続き、自ら止めることは不可能になる。新左翼と呼ばれた各党派は、党派間と党派内「内ゲバ」を、もう自らの力では、いや誰の力によっても止められなくなっていた。

社会が何者かの手によって狂気の領域へと導かれる時代に、弱々しい個人として、なすうる抵抗は、無為か、あるいは小さな自己犠牲だけであるだろう。

（「ハリスト学生の手記」 高橋和巳 音谷健郎『文学の力』より）

高橋和巳は京大四年生の時、破防法反対のストライキを組織し大学当局から処分された活動家のために、友人とハンガーストライキを行った。五日間のハリストで活動家の停学処分は解除され、ハリストを行った高橋ら三人の処分もなかった。周囲は「まれにみる成功」と囁し立てたが、高橋の受け止め方は違っていた。闘いの成果への関心ではなく、あくまでも自らの内面に向かって問い続けた。「自己完成」と「自己犠牲」が高橋のキーワードだった。この高橋も京大の助教授だった一九六九年に「清官教授」として批判される。

しかし三月、「清官教授を批判する」との壁新聞が研究室の窓の下に張られた。清官は、良心的な「清」をふりまきながら「官」にしがみつく思想の退廃だというのだ。「清官教授」が高橋を指していることは明らかだった。高橋は青ざめた。後に、酒で感情を抑えて仮眠しても、ふと目覚めて「嘔吐するように嗚咽した」と書く。

（『文学の力』 音谷健郎）

クラス反戦がほぼ単独で行った体育館占拠から始まった北大闘争

は、今ひとつの到達点を迎えようとしていた。それは「外」に向かうだけでなく、もう一方で自らの「内」に向かっていった。それぞれが何らかの決断を迫られていた。様々な言葉や文章が、棘のようにそれぞれの胸に刺さっていった。

北大では、今、諸君の正しさによって、人間性までふみにじられ、僕たちは深いきずをうけて、もっと具体的にいえば虚無しか展望しえず、あるいは。日頃大学当局に対する不満、うらみが、諸君の正しさによって陰湿に満足せしめられるのみで、諸君と共に闘いと願う芽のようなものまでむしりとられつつ（「北大闘争」の政治主義的拙劣さ！）、たおれているのです。

（『北大闘争中間総括―教養闘争委員会（準）―に対する問題提起』 田中利光）

外から「未熟」と指摘されることに対する戸惑いや「反発」と、内から湧き起こる「自己否定」が結びついた時、孝の闘争初期の生き生きとした感動は全く別のものに大きく変質していた。自己を「否定」し、より正しく、完璧な「自己完成」と、何よりも「自己犠牲」が必要ではないのか。高橋が書いたように、できることはおそらく、何もしないか、自己犠牲だけなのだろう。

遠くから、本物の「武装闘争」を担う「兵士」になることが必要なのだ、という「囁き」が届き始めた。

一一、一九六九年一〇月二一日

新左翼と呼ばれた政治党派のほとんどは六九年秋を「決戦」と位置付けていた。党派の活動家は「決戦」に向けて命懸けの戦いを組織から求められ、又それを「大衆」にも求めた。自他に命懸けの戦いを求める異様な「空気」が外からも内からも、北大闘争と全共闘・C闘委を覆い始めていた。

こうした「空気」に対する違和感や「決戦」に対する疑問を多くのC闘委活動家が感じていたが、「授業再開策動粉砕闘争」の現場で勇猛果敢に戦うものに対する畏敬の念や、理学部からの容赦のない攻撃に対する怒りが、こうした疑問の目と耳を塞いでしまった。今ここにある「不正義」と「命懸け」で戦わない者は、日和見主義者であり軟弱だ、といった間にか思い始めていたのだ。そしてこうした違和感や疑問に手っ取り早く蓋ができるのは「革命」というキーワードだった。「力に力で戦わない者」だけでなく「国家権力と戦わない者」「革命を旨指さない者」が徐々に、そして無意識に、組織から、何よりも自分自身から排除されようとしていた。

札幌における「一〇・二二闘争」は全国的にも特筆される大規模な街頭闘争になった。中心部の大通り公園で三〇〇〇名の集会を行った後デモで北大に戻り、夕方から再び中心部に向かって「武装」デモを開始した。北大から札幌中心部に向かうためには札幌駅横の陸橋

超えなければならなかったが、陸橋上に阻止線が張られた。この機動隊の阻止線突破しなければ中心部に向かうことはできない。党派の部隊を先頭に投石や火炎瓶で突破を図ったが、阻止線は微動だにしないばかりか、催涙弾の水平打ちや時々繰り返し返される機動隊の突入によってこちらの部隊は散り散りにされ多くの逮捕者を出した。この戦いは機動隊の阻止線突破するどころか、意味のない突撃を繰り返して一〇〇名近い逮捕者を出す「消耗戦」になった。

北大全共闘の部隊はこの街頭闘争の中核を担った。C闘委・学部共闘のノンセクトの活動家だけでなく、浪人共闘や他大学のノンセクト学生が加わり、党派に匹敵するかそれを超える数の部隊だった。数多くの逮捕者だけでなく、多くの怪我人を出し、陸橋上の阻止線突破しようとした市街戦は深夜を超え、明け方まで続いた。

この勢いが一〇月二一日の国際反戦デー闘争につながり、全共闘五〇〇名、革マル派五〇〇名、ベ平連一六〇〇〜二〇〇〇名と動員数は「飛躍的に増大」し、「従来の闘争を質量ともに陵駕」するが、「登りつめたという印象」もあった。・・・(「北大闘争の位置と思想」)



その中で「デモ隊の誰かが死んだ」という噂が駆け巡った。時折突入してくる機動隊は催涙弾だけでなく警棒で学生たちを圧倒的な力で規制をした。ヘルメットを割られ、血を流し重傷を負った学生も多くいた。誰かが死亡しても何の不思議もなかった。

北大では数少ない中核派で医学闘の久島が「誰かアジテーションのうまい奴がアジレ」と提案した。「二〇・八の時もそうだった。誰かいないか」。死者が出たかもしれないという情報は必ずしも怒りや憤激を呼ばなかった。むしろ驚きと畏れに近い感情が、明け方まで北大の正門を守っていた学生たちを支配していた。「おい、岡戸がやれ」

この場にいた党派の活動家たちは口を揃えた。孝は肩車され、口に手を当てて出せる限りの大声で、正門を守る学生たちにアジテーションを行った。孝のアジテーションはいつも「詩」のようだと言われていた。

何という暗い夜明けだ。

しかし、夜明けがいつも明るく光り輝いているとは限らない。

たった今、機動隊によって一人の仲間が殺され、何処かに運ばれた。又、機動隊が殺したのではなく、事故や同士討ちによって死んだのだと言われるだろう。

しかし、忘れないでおこう。

彼は闘いの中で権力によって殺されたのだ。

この戦いは権力に蹴散らされまもなく終わるかもしれない。

しかしそれは断じて今ではない。

我々が戦いを続ける限り、闘いが終わることはないのだ。

戦いを続けようではないか。

殺された彼と、彼の意思を受けついで、戦い続けよう。

夜明けがやってきた。

誰もやらなければ自分がやるしかない。今まで何度もあった決断だった。しかしこのアジテーションは、孝にもうこれで引く事は絶対にできないと決断させた。闘いでとうとう「死者」が出た。孝が本部

に立てこもり最後まで戦うことを最終的に決めたのはこの時だったような気がする。

同時に多くの C 闘委の活動家は、あらためて、党派ではなく自分たちが、これからの闘いの中心を担うことになる、と感じていた。街頭闘争にこれだけ「大衆」が決起し、いつの間にか自分たちは「市街戦」の中心にいたのだ。

・・・覚醒が自律的だったことを次の C 闘委の主張は示唆している。

一〇・二二に決起した三〇〇〇名の大衆は「壮大なゼロ」では決していない。革マル派諸君のように「彼らが反スタ前衛党に指導されていたかどうか」とか「マルクス主義者たらんとしていたか云々」という一切の観念的おしゃべりはやめよう。確かに即時的意識のままではブルジョア社会の幻想へと包括されていく。しかし、大衆はバカではない。彼らを「指導するかどうか」が問題ではない。大衆は行動を、実践を通じ自らを鍛える。

C 闘委をここまで成長させたのは「マルクスの学習会」でも「反スタ前衛党の指導」でもない。

「観念的おしゃべり」や「即時的意識」は相対化され、「行動、実践」が重視されている。反スターリニズムや前衛、はてはマルクスまでもが捨て去られている。

（「北大闘争の位置と思想」 河西英通）

なおこの時の「誰かが死んだ」というのは全くの誤報で、「死んだ」と言われた本人が一週間ほど後に孝を訪ねてきた。「岡戸さん。僕のためにアジってくれたんですね」彼は北大を目指していた浪人生だった。

一二、ヘルメットと女性たち

当時の学生運動の象徴だったのはヘルメットだった。最初はデモの際の機動隊の規制や党派間のゲバルトの際に頭を守る防御用だったが、党派がそれぞれ色分けされたヘルメットを使うようになって、まずそれぞれ党派の象徴になった。赤は社学同、青は社青同解放派、白のヘルメット正面に「中核」と大きな字で書いたのは中核派、同じく白色だがヘルメットの円周に赤色のテープを巻き「Z」と大書したのは革マル派だった。

どんなふうにそれぞれの党派が色を決めたのかは不明だが、ヘルメット使い始めるのが後になればなるほど、色を決めるのに苦労したに違いない。フロントなど構造改革派は緑、社学同系の Z 派はモヒカン刈り風に太い白線を入れた赤ヘルメット、社学同マル戦派は銀色だった。民青は黄色が多かったが、わざわざヘルメットを黄色

に塗ったのではなく、元々黄色の工事用「安全ヘルメット」を大量に買って使っていたのだろう。

ヘルメットの顎紐にタオルをかけてマスクのように覆面をすると、誰が誰だかわからなくなる。ヘルメットは、自分の頭を守るだけでなく、デモやゲバルトの際に個人を特定されるのを防ぐという意味でも「防御用」だった。しかし、いつの間にか党派やグループの象徴、まるで「制帽」のようになっていく。同じ色のヘルメットの集団は一人一人の人間の集まりではなく「〇〇派」、更にヘルメットでデモをする集団はすべからず「暴力学生」と呼ばれるようになっていった。

クラス反戦の学生たちは当初ノンヘルでデモや集会に参加したが、同じ色のヘルメットを揃えるクラスが出てきた。党派の色ではない色を考えて白色の市販ヘルメットに、カラーズプレーで色を塗った。主要な色は党派が使っているのでピンクとかオレンジ、トリコロールのヘルメットも登場した。アナキストの色とされた黒色のヘルメットも多かったが、結局使う色がなくて黒色にした場合が多かった。書かれている文字も多様だった。「反戦」が一番多かったが、「Z〇Z」とか「叛」も多かった。いずれにしても、クラス反戦やC闘委の隊列は、いつもカラフルで「華やか」だった。

クラス反戦やC闘委の隊列が「華やか」だったのにはもう一つ理由があった。党派の隊列に比べ女子学生が多かったのだ。おそらく当時の女子学生の比率（一〇％）と同じかそれ以上の比率だった。

『北大時報』第二七一号（一九七六年一〇月）によれば、教養部には、一〇月一日現在で、二学年合わせて四六六四名の学生が在籍している。全学の、大学院生を含めた学生数の四六％弱に当たり、大学院生を除けば五〇％弱に相当する。教養部の女子学生は、四七八名で、一〇％をわずかに超えている。また別な統計によれば、教養部在籍者の過半数は北海道出身者であるが、それでも約四六％は、他の都府県出身者で占められている。いずれにせよ、教養部は、学生数からすれば全学で最大の部局である。

（『北大百年史』「部局史 教養部」）

特にフランス語専攻クラスのクラス反戦「F共闘」には女性が多かった。入学式闘争と一緒に闘った進藤の記憶に、この「F共闘」の女性が登場する。クラス反戦連合は、入学式闘争時にまだ自前の「旗」を持っていなかった。急きよその旗を作る「役割」を「F共闘」の女性たちが担ったのだろう。

「（入学式闘争が）終わる（直）前に、F共闘のDさんが、徹夜でつくった「クラス反戦連合」の旗を持ってきてくれた。まだ未完成品で、ところどころに縫い針がついていた。」

（入学式闘争を共に闘った友人進藤のメール（ ）内は筆者の補足）

しかし、孝の記憶には、これまでのさまざまな闘争のどの現場にも

女性たちは登場しない。ノンセクトの学生たちだけで行った体育館占拠闘争にも、孝の記憶の中では女性はいない。体育館のガラスのドアを前に躊躇していた仲間も、正面の大きな「日の丸」を乱暴に叩き落とそうとした孝を止めた仲間も、トイレにこもってなかなか出てこなかった仲間も、みんな男だった。

孝に唯一あるのは、授業再開策動粉碎の自治会系の学生との戦いで、石礫が飛び交う前線に同じクラスの女子学生 S さんが何かを届けに来てくれた時の記憶である。彼女は届けただけでなく、その場にとどまって一緒に戦いに加わろうとしたのだ。その時、「ここは危ないから後ろに下がれ」と強い口調で言った孝に S さんが向けた視線は、今でも忘れることができない。それは、何かに抗議するときの「怒り」だけでなく、強い失望を感じた時の「落胆」の表情だった。「あなたたちも今までの男と同じじゃない。何ひとつ変わっていない。」

大きな杉の古木にきたら

一層暗いその根本に腰をおろして休もう

そして独占の機械工場で作られた一箱の煙草を取り出して

暗い古樹の下で一本の煙草を喫おう

近代社会の臭いのする その煙を

古木よ おまえは何と感じるか

原始林の中にあるという湖をさがそう

そしてその岸辺にたたずんで

一本の煙草を喫おう

煙をすべて吐き出して

ザツクのかたわらで静かに休もう

原始林を暗やみが包みこむ頃になったら

湖に小舟をうかべよう

衣服を脱ぎすて

すべらかな肌をやみにつつま

左手に笛をもって

湖の水面を暗闇の中に漂いながら

笛をふこう

(『二十歳の原点』高野悦子 六月二三日の日記より)

C 闘委のヘルメットの色はやがて黒一色になった。そして、ヘル

メットは闘いの「象徴」になり、いつの間にかそれは「権威」の象徴になっていった。

ヘルメットを最初に脱ぎすて、「旅に出た」のは、おそらく女性たちだった。

一四、「大衆叛乱」のまぼろし

闘争が「闇」に飲み込まれそうになったこの時期、「状況を打開する何か」を期待する空気が北大闘争とC闘委を覆い始めていた。闇が徐々に迫って来る予感の中で「出口の光」を求めるような気持ちだったに違いない。近くにあるかも知れない「真の前衛党」や、遠いところから届いてくる「本物の武装闘争の誘い」にそれを求めようとした者もいたが、近かろうが遠かろうが、「真なるもの」や「正しい答え」はどこからもやってくるはずはなかった。

ブント（社会学同）から誕生した赤軍派は「一〇・二一」などの大衆闘争を闘いの前進にとり意味のない「壮大なゼロ」と考えた。北大全共闘の「一〇・二一」を同じように評価したのは革マル派だったが、赤軍派も形を変えた「前衛主義」だった。大衆はいつも未熟であり、「外部」から正しい理論や方針を「注入」しない限り間違いを犯すのだ。大衆を指導するのは強固な「秘密組織」で、その組織は「強固な主体」で形作らなければならないが、少なくとも誕生したばかりの赤軍派は、「秘密組織」でもなく、「強固な主体」によって形成されてもいなかったようだ。

闘いの先鋭化を急いだブントでは、赤軍派が七月派生します。こ

した大衆的高揚は、闘いの前進にとり意味のないもの、権力の壁をけつて突破できないものと主張されたのです。いくら大衆が集まっても、闘いの質においては「壮大なゼロ」という考えです。

・・・大菩薩峠で武装訓練をしていた赤軍派五十三名が逮捕されるのは十一月五日ですが、逮捕者の三割はまだ少年の高校生たちでした。

『新左翼とは何だったのか』荒岱介

この大菩薩峠で逮捕された赤軍派の中には、「秋季決戦」を見据え、自らの意志で単独東京に向かい赤軍派に加わったC闘委の仲間もいたが、C闘委・全共闘の多くの学生は、スチューデント・パワーと呼ばれた若者たちの叛乱、特にフランス「五月革命」の「カルチェラタン闘争」に「光」を求めている。確かにあの時、パリには一時的ではあったが「解放区」が生まれたはずだ。

赤軍派を生んだブント（社会学同・共産同）には「大衆叛乱型革命路線」を主張するグループがあり、北大にも少数だが存在した。組織化を全く重視しない彼らは「大衆叛乱」を実現することだけを目的にしていたようだ。彼らは北大の三派活動家たちより先輩で各派のリーダーと同年輩だった。六〇年安保闘争で「国会突入」を指揮した全学連の輝ける委員長唐牛健太郎を生んだ「北大ブント（社会学同）」の流れを受け継いでいると自負していた彼らは、実際フランスに行つて「カルチェラタンの戦いも経験した」と孝に語ったことがあった。

北大全共闘の多くの活動家たちは、「一〇・二二」に「カルチェラタン」のまぼろしを見たのかもしれない。確かに、あの日の機動隊は、催涙弾を打ち尽くし、疲れ果てた様子で早朝引き揚げた。一〇〇人近くの逮捕者を出した闘いだっただ、正門前には一瞬だけ「解放区（カルチェラタン）」が生まれ、何よりも我々の本部バリケードは「大衆の叛乱」によって守られた。

またもや北大に過去の亡霊があらわれたのだ。「亡霊」たちは「カルチェラタン」というまぼろしを孝たちに見せた。北大闘争の「最後の砦」本部バリケードを守るために「カルチェラタン」を再び出現させなければならぬ。そのためにそれぞれができる限りのことをするのだ。「亡霊」は一人一人に、呪文のような問いかけをしていた。

「北大前解放区を経験した我々には行き着く先が如何なるものかは直感的に感じていました。来るべき『本戦である本部闘争』に向けて準備をする中で『お前は闘うのか?』を問い問われていました。」

（広野からのメール 二〇二二年）

「一〇・二二」以降、本部バリケードを強化する作業が再び突貫工事で行われ始めた。誰かが計画し、指示するのではなく、それぞれが思いつく限り、できるだけのことをした。本部正面のバリケードは学部共闘の学生がコンクリートで固めた。土が必要で掘られた穴は、いつの間にか本部正面を守る深い塹壕になり、塹壕の前にもバリケ

ードが作られた。一階から屋上までの階段のバリケードは思い思いに手が加えられ、さらに強化された。階段バリケードに機動隊が簡単に解除できない細工をしたという仲間もいた。本部のバリケードは「日本で一番ゲバルトの弱い全共闘」の様々な「想い」が込められ、おそらく「日本で一番強固なバリケード」になった。



「強固な本部バリケード構築は誰がというより様々な人たちの合作品と言える。中央ローンの小川から砂利を取り、何度も皆でバケツで本部に運び、正面玄関の分厚いコンクリートの壁となった。大量に必要とされる土も、塹壕を掘ることでのいだ。」

（進藤からのメール 二〇二三年）

本部前にある大きな樹を切り倒そうとした仲間もいたが、それはみんなに止められた。たしかに、大学当局にあっても本部前の古木に「罪」はない。

「一〇・二一」の後、最も大きな「罪」があるはずの「政治権力」に対する闘いが急遽行われることになった。対象に自民党道連の事務所が選択され、ブントを除く解放派と中核派から、それぞれリーダークラスの中心的な活動家がこの闘いに志願した。この二人にC闘委の滝田を加えた三名が、機動隊導入が予想された一月八日の前々日、札幌駅近くのビルにある自民党道連を「占拠」して大きな垂れ幕を垂らした。三人は程なく「突入」してきた機動隊に逮捕された。滝田は戦術会議にたまたま居合わせただけだったが、いささかの躊躇もなく、逮捕必須のこの任務を引き受けた。おそらくC闘委・全共闘の学生たちにとって、本部バリケード解除に対する闘いは、それぞれの何か大切なものを賭けた本当の「決戦」だった。

一〇月二二日、緊急評議会は市民に迷惑をかけるおそれが生じた場合、機動隊導入もありうるとの新方針を出した。同二四日、堀内は国際反戦デーが近隣市民に迷惑をかけた謝罪文を新聞に掲載し、一月四日に封鎖学生に対して退去を勧告した。対抗するかのよう同六日に全共闘系学生が自民党道連を一時占拠し、屋上から

「七〇年安保粉碎，自民党政府打倒」

「北大全共闘反帝学評，北大バリケード死守」

「十一月佐藤訪米阻止」と書いた垂れ幕を掲げた。

（北大闘争の位置と思想」河西英通）

この時「カルチェラタン」を再び作り出そうとする動きも始まっていたようだ。「本部決死隊」に決まっていた孝たちには、おそらく「これ以上負担をかけない」という配慮からだろう、これらの計画はほとんど知らされていなかった。しかし、C闘委の誰かが「必ず連帯の闘いをするから屋上から見えてくれ」と言ったことを孝は覚えている。まだ高いビルが少ないこの頃、本部の屋上からは札幌のテレビ塔が見えた。

一五、一九六九年十一月八日 「インター」は聞こえたか

北大封鎖解除の記事は、地元の『北海道新聞』夕刊に五面にわたって掲載された。ほとんどが警察発表に沿った内容だが、地元の新聞だけあって、当日の攻防については「市街戦」を含めて詳しく報道されている。本部にたてこもる五人を守るために、北大全共闘と

C 闘委員は力をふりしぼって、できる限りの規模の「市街戦」を闘った。

なお、この夕刊に札幌市の十一月八日の天気も載っている。天気は「曇り」、午前六時の気温は六度だった。

逃げながら市街戦 学生 道路にバリ築き抵抗

放水車、装甲車を先頭に、押し寄せる機動隊。学生たちは投石で立ち向かったが、圧倒的な“戦力”の前に、たちまち本部前に追い詰められ、さらに門外へ。そして落ちのびた先々で市街戦騒ぎを繰り広げ、執拗な抵抗を続けた。

機動隊の主力は、クラーク会館横と南門、北門の三ヶ所から、北大構内に突入した。南門での投石、放水の激しい攻防も一時間半。突破口を開いた機動隊は、一挙に学生たちを追散らし、大学本部前でデモ、投石で抵抗した一隊とともに、正門の西五丁目電車通りにしめ出した。

ここですでに最初の“市街戦”。門外に出た警官隊に、北九条、西五丁目北の二方向から、罵声と投石の雨を浴びせ、一進一退を繰り返して、乗り入れたパトカーを転覆させるなどひとしきりあばれ回った。

た。そのたびに、歩道を埋めつくした見物人たちが大きな声をあげる。しかし、次々と新手を繰り出す機動隊の猛攻に、八時すぎに西四丁目以東まで後退、中には観衆の中に逃げ込む学生もいた。

電車通りを北に追われた北大ベ平連などの学生は、途中、ゴミ箱などで道路にバリケードを築き、機動隊の急襲を食い止めながら、午前十時前、北一三ー一四条付近、北大病院前交差点で、構内から次々出ては波状デモ。一隊が引き揚げると、学生たちが一斉に『機動隊粉碎』のシュプレヒコール。

さらに電車通りでは、やはりベ平連系のノンヘル学生が投石攻撃。群衆にまぎれて投石していた女子学生二名が、逃げ遅れてつかまった。沿道の商店は、二階の窓をあけ広げ、仕事にならない店員たちが『キャーキャー』いって“観戦”していた。

『北海道新聞』一九六九年十一月八日第八版 夕刊一〇面

投石、火炎びんの雨 機動隊 窓ぶち抜く放水

封鎖派学生の拠点となった大学本部での衝突が、この日の最大の攻防戦となった。

放水車を先頭にした機動隊が南門入り口に到着したのは午前六時ちょっと前。門内側のバリケードのかけから投石で抵抗する学生たちに放水で応酬。やがて教養部の解除を終えた機動隊も学生の背後

から攻め立てて、正門から西五丁目の電車通りに追い散らし、どつとなだれ込んだ機動隊員約六百人が、本部をぐるりと取り囲んだ。しかし、午前六時半すぎ本部の周囲にめぐらせた古材や切り倒した木の枝に火が放たれ、それが一・二メートルの炎をあげて、まるで“火炎バリケード”。それに加え、電車通りに出た学生らが、投石の援護作戦に出て、すぐ排除作業にかかることができない。

午前七時五十分、警察の装甲車に乗った北大の吉田事務局長（学長代理）が『封鎖中の学生諸君、すぐ退去しなさい』とマイクでしるような声。しかし、屋上や周囲からの投石、火炎びんに放水の応酬で、一時間以上にもわたって一進一退を続けた。

午前九時四十分過ぎ、三台の放水車が一齐に水柱を吹き上げ、本部の窓が『バリバリ』とくだける。鉄板を組んだヤグラに十数人の機動隊員がはいり、建物に向かって一歩一歩前進する。屋上から間断なく火炎びんが投げ落とされ、『バーン』というさく裂音とともに燃えあがる。屋上の学生めがけて放水という激しい攻防戦の末、十時半すぎ、本部北側に待機していた機動隊員五人が、裏側の一階窓ガラスを打ち破ると、建物内部にはいり込んだ。

『ウラをかかれた』と学生がひるむすきに、正面の窓からも機動隊員がどつとなだれ込み、直ちに排除にかかったが、屋上への侵入を防ぐため学生が三階のバリケードに重油をかけて火をつけ、それが黒煙を吹き上げて燃え続けるなど、学生の抵抗は最後まで続いた。

（『北海道新聞』一九六九年一月八日第八版 夕刊二一面）

屋上に最後の五人 逮捕も特製のゴンドラで

この日の解除戦の大詰めは、昼すぎ“最後のトリデ”本部屋上に残った“死守”学生五人の逮捕だった。

遠くから取り囲む群衆五千人、それに機動隊員、北大職員らが見守るなかで、肩を組んでインターを合唱、さらに『闘争勝利』のシユプレヒコール。これにこたえて、地上の学生たちから拍手がわく。

午後零時半、道警機動隊長らが、特製の“パイプゴンドラ”に乗って屋上へあがり、五人に『もう抵抗はやめなさい』と語りかけた。隊長の話では『ずいぶんがんばった。それは認める』と話すと五人は『わかった』というふうにならずいた、という。

逮捕した“トリデの主たち”は西側に渡されたハシゴ車から一人一人降ろされた。長い髪の毛は放水の水をあびてびしょぬれ。寒さのせいか顔は青白く、半病人のような足取り。逮捕の理由を知らされると、五人のうち三人は力なくならず、二人は表情も変えず、護送車の中に消えた。

（『北海道新聞』一九六九年一月八日第八版 夕刊二一面）

孝は当日の行動の詳細をあまり覚えていない。無我夢中だったからだろう。しかし、「抵抗をやめた」前後のことは覚えている。

本部の三階から炎と黒煙が吹き上がり、ほうほうの体で階段棟から脱出した後は抵抗をやめた。仲間が作った「日本一強固なバリケード」のおかげで、心配していたように、あつという間に蹴散らされ、無様な形で解除されることはなかった。

孝は隣にいた進藤に言った。「昼までもったな」

屋上に上がってから引きつっていた顔がこの時初めて緩んだ気がした。



「あれだけのバリケードを築くことができたことが、誇りの一つと

感じるものが、後に複数あった。『昼までバリが持った』というのは実感であった。捕まって中央署に入った時に、各房にたくさんいた一〇・二一で捕まった学友に言った第一声は、『昼まで持った。』（進藤からのメール 二〇二三年）

孝たちは肩を組んでインターを歌った。それは「北大」に向けたものではなかった。全く正反対にある「市街」に向かって、何よりもテレビ塔に向かって、インターを歌った。

このインターは、それぞれ自分にとって大切な何かを賭けて闘った間たちに向けられたものだった。テレビ塔の方向からやはり火柱は見えなかったが、炎は仲間たちそれぞれの「内」に灯った。それこそが「まぼろし」ではない、本物の「炎」だった。

「一一・八の朝日を何処でみたか？

一一・八の夕日を何処でみたか？

それが、私たちのその後の人生を決めたと思います。

私は、一連の本部闘争を向側からずっとみていました。

そこには、仲間がたくさんいました。皆一様に涙を流していました。

たぶん、その時に何かの時計が止まってしまったと思います。」

（広野からのメール 二〇二三年）

（第一章 完）

これは三人称で書かれた個人史である。あくまでも個人の記憶にすぎない。ただし、その記憶は一人だけのものではなく、時代を共に生きた人々の記憶と、それぞれが五〇年間大切に保管をしていた記録によっている。

文中の個人名は公職者以外、基本的に仮名とし敬称を略した。又、記述に出てくる政党名や組織名は五〇年前のものである。この五〇年間でほとんどの組織は組織方針を大きく転換し、組織名を変更、または組織そのものが消滅している場合がある。

（文中の写真は、写真集『北緯四三度 荒野に火柱が』より制作者の了解を得て使用した）

病と戦っている友人たちに贈る。